国研紀要155（2020.3）：99-158

〈論説〉

ラーマ一世王と阮福映（1782-1802年）

川口　洋史

はじめに

本稿は1782年から1802年における、ラタナコーシン朝の開祖ラーマ一世王（1736-1809年、在位1782-1809年。以下、一世王）と、のちに阮朝を開く阮福映（1762-1820年、王位1780-1806年。帝位1806-20年、嘉隆帝）との関係の軌跡を実証的に検討しようとするものである。それを通して、1802年から1830年代初頭におけるラタナコーシン朝シャムと阮朝ベトナムとの関係がいかに準備されたのか、その一端を示したい。

吉川利治がシャム・ベトナム双方の史料を用いて描いたように、ラタナコーシン朝と阮朝との関係は主としてカンボジアをめぐって展開したとされる（吉川1975）。ローゼンベルクもまた、17世紀末から19世紀始めに至るシャムとベトナムの関係を実証的に描きつつ、カンボジアにおける優位をめぐる争いが両国関係史の動因であったと指摘している（Rosenberg 1975）。

このような指摘が確かに正しいことは、カンボジアを視点とした北川香子の詳細な研究からも明らかである[(1)]。1670年代から1730年代までにカンボジア王族は2つの勢力に分かれて争い、アユタヤー朝と広南阮氏がそれぞれ一方を支援した。1748年にも似たような事態が出来している。1767年にアユタヤーがコンバウン朝ビルマに滅ぼされるが、タークシンがビルマ軍と群雄を駆逐してシャムを再統一した（トンブリー朝）。このときもやはり、カンボジア王ウテイ・リエチエはタークシンへの服属を拒否して阮氏を頼った。タークシンはアン・ノーンを王に立てるが、最終的に阮氏がこれを殺してアン・エーンを擁立した。

1782年にタークシンは弑逆され、大臣の1人チャオプラヤー・チャクリー

(1)　以下、北川（2006：172-192）、『大南寔録前編』、『大南寔録正編第一紀』、『大南寔録正編第二紀』、PRPR1、PRPR2、PRPR3、川口（2019）などによる。

がラーマ一世王となってラタナコーシン朝を開く。一方で、西山阮氏の攻撃によって、広南阮氏の生き残りであった阮福映は嘉定（サイゴン）からバンコクに亡命した。またアン・エーンも自国の混乱からバンコクに亡命していた。阮福映はシャムなどの支援を受けて1802年に西山朝を倒し、阮朝を開く。以後、阮朝皇帝とシャム王の間では頻繁に国書と使者が交わされ、友好な関係が樹立された。またカンボジアに復帰したアン・エーン王はシャム・阮朝双方に朝貢し、三国の関係は比較的安定した。

しかし1809年に一世王が死去すると、カンボジアをめぐってシャム・阮朝の関係が悪化していく。アン・エーンを継いだアン・チャン王は阮朝に傾き、ついに亡命するに至る。その後シャム・阮朝の外交折衝の結果、アン・チャンは帰国するが、阮朝の官僚の監督下に置かれた。1815年にはカンボジア軍とシャム軍が交戦するに至り、シャムは阮朝の責任を問うた。1827年にウィエンチャン王アヌがシャムに反旗を翻すと、シャムと阮朝の関係はさらに悪化する。1832年に国書の往来が途絶えた。翌年に黎文懐が阮朝に対して反乱を起こしたのに呼応して、シャムはカンボジアに攻め込んで阮朝との戦端を開いた。アン・チャンは阮朝に亡命する。1846年に和平が成立し、47年から翌年に阮朝・シャム双方がアン・ドゥオンをカンボジア王に冊立し、両国に朝貢させることでようやく戦争は終結した。

そのほか、シャム・ベトナム双方の史料を用いた研究としては、両王朝君主のリーダーシップに焦点を当てたエーランドの論文と、双方の世界観のなかで外交関係を捉えようとしたモーラコットウォンの論文がある（Eiland 1989; Morragotwong 2011）が、両国の関係が主にカンボジアをめぐって展開したという点では変わるところがない。

しかし、カンボジアに関する出来事によって両国の関係のすべてを説明することはできない。たとえばラタナコーシン朝と阮朝のあいだにおける、頻繁な使者と国書の往来である。往路、使者は必ず君主から君主に宛てた国書を携え、しばしば返答の国書を受け取って帰った。1830年頃まで、それらの国書はタイ語においても漢文においても両国君主を対等としていた。また少なくとも二世王期においては、シャム宮廷は嘉隆帝の漢文国書をほぼ正確にタイ語に訳していた。これらは清朝とのあいだには見られな

い、シャム宮廷にとってはごくまっとうな国書のあり方であったと思われる（川口2019）。その往来の回数は特筆に値する。『欽定大南会典事例』巻136、礼部、柔遠、暹羅によれば、1803年から32年まで阮朝は16回、シャムは17回、使節を派遣している。

このような頻繁な使者と国書の往来は、それ以前にもそれ以後にもない。1750年、広南阮氏政権の礼部がアユタヤー王に書簡を送り、カンボジア王アン・スングオンを後援していることに釘を刺した。1755年にはアユタヤー宮廷が使者を送り、高官名義の書簡を阮氏政権にもたらした。礼部が返書し、のちに安南国王から暹羅（シャム）国王に宛てた返信も送られた。ただしこれらは難破したシャム船の処遇に関するものである。確認できるかぎりでは、アユタヤーと阮氏政権のあいだで交わされた文書は以上に留まる(2)。一方で、カンボジア王が再びラタナコーシン朝と阮朝に服属することになった1847年以後も、両王朝の君主のあいだで国書を交わすのは途絶えたままであった。ようやく1879年に嗣徳帝が五世王に国書を送る（Koizumi 2016）が、それはカンボジアとは関係がない。つまりカンボジアに関する事柄は両国、特にシャムが使者と国書を送るのに必ず結びつくとは限らなかった。両国の関係が一貫してカンボジアをめぐって展開したのであれば、なぜ1803年から32年のあいだのみシャムが阮朝と密な関係を結んだのかを十分に説明できない。

くわえて両王朝が交わした文書に言及されているのは両国やカンボジアの事柄だけではない。これは小泉（2008）が描いている通りである。とりわけ興味深いのは、阮朝とは直接関係のないはずのビルマがしばしば話題に上っていることである。1803年、まさに現存する阮朝最初の国書からして、ビルマのシャム攻撃への懸念と、それが止んだことへの喜びが記されている。翌年、シャム宮廷は阮朝にタイ北部におけるビルマ軍への勝利を伝えるとともに、シャムが下ビルマに攻め込む際は、海軍を援軍として

(2)　『撫辺雑録』巻5、155葉表–170葉表。『大南寔録前編』巻10、16葉裏–17葉表、庚午12年2月条、26葉表裏、乙亥17年4月条。川口（2019：122–123）。なお『大南寔録前編』巻10、27葉表裏、乙亥17年4月条に、嘉定の船が嵐に遭ってナコーンシータンマラートに流れ着き、シャム人に捕獲されたため、嘉定の官僚がシャムに書簡を送ってこれを責め、帰国せしめた記事がある。しかしその書簡の宛先がアユタヤー宮廷なのかナコーンシータンマラートの地方権力なのか不明である。

寄越すように要請した[3]。同様の要請は1809年にもなされたが、嘉隆帝が渋るうちに戦いが終わった[4]。両国の関係がぎくしゃくするなかでも、ビルマへの言及は続く[5]。

なぜシャム宮廷はビルマについて阮朝に伝えるのか。それを推測するのはさほど難しくはない。1811年の阮朝宛て国書に、ベトナムはすでに平和になったが、シャムはなおビルマと戦っており、もしビルマがシャムに攻めてきたら、助力してほしい、と表明されているように（Narinthrathēwī 2003: 614–617）、ビルマの脅威に対抗するためであろう。先行研究は、シャムは背後を固めるために、ときに阮朝に対して妥協を余儀なくされたとまで言っている（Mayoury and Pheuiphanh 1998: 96–100）。しかし上述の通り、両国の関係が阮朝の成立当初からビルマを念頭に置いたものであったとすれば、それ以前に遡って、具体的に何をきっかけとして、いかなる過程を経てそうなったのかを探らなければならない。阮福映にとって一世王政権は、彼と提携した国際的な諸勢力のなかの一つであった（桜井1999：210–214；嶋尾2001：300）。それでは一世王にとって阮福映とその政権とは何であったのか。

ところがシャム・ベトナム双方の史料を用いた先行研究でも、1802年以前における一世王政権と阮福映との関係を実証的に、かつ仔細に検討しているわけではない。吉川（1975）はあくまで概略的な通史を提示するに留まる。エーランド（Eiland 1989）とモーラコットウォン（Morragotwong 2011）は双方の史料を参照するに留まり、それらを突き合わせて事実に迫ろうという意欲に欠ける。また必ずしも詳細ではなく、特に阮福映が嘉定に復帰したのちのシャムとの関係は手薄である。ローゼンベルク（Rosenberg 1975）はもっとも実証的であるが、問題がないわけではないし、取り上げられていない出来事も少なくない。

もちろん、だからといってこれらの論文に価値がないわけではない。それぞれの論文には目的があり、関係のない事柄を記す必要はないからである。それに紙幅の問題もある。史料を逐一照らし合わせるとなると、とか

(3)　NL. CMH. R. I. C.S. 1164, no. 3; C.S. 1166, no. 2.
(4)　『大南寔録正編第一紀』巻38、12葉表–13葉表、嘉隆8年6月条。
(5)　NL. CMH. R. II. C.S. 1174–1177, no. 9; C.S. 1175, no. 23.

く字数を必要とし、ともすれば論の運びは冗長になる。本稿もその誹りを免れえないだろう。しかしそれでも両王朝の根本史料、『ラタナコーシン朝年代記』と『大南寔録』のあいだの齟齬や溝の指摘さえされていない現状よりはよい。

そこで本稿は基礎的な作業として、シャム、ベトナムおよび近隣諸地域の史料を一々突き合わせ、史料批判を加えながら、1782年から1802年までの一世王と阮福映の関係を可能な限り仔細に明らかにすることを目標とせざるを得ない。そしてそれが、ビルマをも視野に入っていたラタナコーシン朝と阮朝との関係をいかに準備したのかを示す。ただし本稿が明らかにするのは、あくまで両王朝の関係を規定していた諸要素の一部である。

本稿で用いる主な史料について簡単に説明しておこう。まずシャム側の史料についてである。阮光纘や阮朝成立以後に嘉隆帝が一世王と交わした国書（プララーチャサーン）のタイ語訳や控えの写しは現存しているが、それ以前に阮福映とシャム宮廷が交わした文書は、原本は言うまでもなく、タイ語訳も控えも伝世していない(6)。したがって本稿が問題とする時期については年代記を主に利用するしかない。まずは『王朝年代記（プララーチャポンサーワダーン）』—所謂『アユタヤー王朝年代記』—諸本の末尾、トンブリー朝最末期からラタナコーシン朝の最初期にあたる部分である。年代記諸本（ローマ字は略号）の成立年と、記述されている時期の下限をまとめると、次のようになる(7)。

①パン・チャンタヌマート本（PC）：1795年成立。1784/5年まで記述。
②大英博物館本（BL）：1808年成立。1784/5年まで記述。

(6)　これは、国書と阮朝成立以前の阮福映の文書とでは、シャム宮廷政府における処理と保管の方式が異なっていたことに起因すると思われる。シャム王が清朝や西山朝・阮朝の君主と交わした文書の写しやタイ語訳は、祐筆局（กรมพระอาลักษณ์ krom phra ʻālak）が所管し、王宮付属寺院の王室文庫に保管されていた。これらはよく現存している。一方、1802年以前の阮福映は属国の王として扱われ、大蔵大臣が彼との通信を担当していた。民部省（กรมมหาดไทย krom mahātthai）が北方・東方の属国の王との文書を処理・保管していたように、阮福映と交わした文書は大蔵省（กรมพระคลัง krom phrakhlang. 港務省กรมท่า krommathāとも言う）が処理・保管していたと思われるが、他の大蔵省文書とともに失われたようである。川口（2006；2019）を参照。

(7)　石井（1999（1964））も参照。

③プラ・ポンナラット本またはパラマーヌチット本（PP）：成立年不明。1790年まで記述。
④宸筆本（HL）：1855年成立。1791年まで記述。
⑤ブラッドレー本（BR）：1864年刊行。1793/4年まで記述。

本稿が問題とする時期について言えば、①と②がほぼ同じ内容を有する。対して③④⑤がもうひとつのグループを作り、①②よりも記述が詳しくなる一方、時が経つにつれて理解できなくなった語句が削除されたところもある[8]。

これらよりも重要なのが、1869年にチャオプラヤー・ティパーコーラウォンが五世王の要請を受けて編纂した『ラタナコーシン朝年代記』（一世王期部分をPRPR1と略記）である[9]。1782年から始まる同王朝の正史であり、最初期部分はパラマーヌチット本を増補する形をとっている。阮福映との関係についても詳しく、今日では失われた大蔵省文書に基づいていると思われる。

次にベトナム側の史料としては、『大南寔録正編第一紀』60巻（1847年刊）、『大南正編列伝初集』33巻（1889年刊）が根本史料となる。慶應義塾大学言語文化研究所から出版された影印本をテキストとして用いる。またベトナム南部の地理書である、鄭懐徳撰『嘉定城通志』6巻（1820年成書）、河僊（ハーティエン）に割拠した華人・鄭氏の家譜である、武世営撰『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』（1818年成書）[10]も、特に一世王と阮福映勢力との関係の始まりについて見るべき記述を含む。そのほかベトナム・ハノイのハンノム研究院が所蔵する鈔本数種を利用する。

さらに必要に応じて『コンバウン朝大御年代記』（KBZと略記）、ウィエンチャンやチェンマイなどの年代記を参照することになる。以上、用い

(8)　註18を参照。
(9)　英訳としてDCがあるが、その底本はダムロン親王改訂本であり、註釈によってフォローされているように、ティパーコーラウォン本とは異なるところが多い。
(10)　テキストとして陳荊和注釈本と戴可来・楊保筠校注本を用いる。筆者の理解するところでは、双方ともパリ・アジア協会が所蔵する鈔本（アンリ・マスペロ旧蔵本）を底本としているにもかかわらず、両者のあいだに字の相違がかなりある。どういうことなのか、専門家のご教示を請いたい。本稿では史料原文を引用する際に、必要に応じて陳本、載本として字の相違を示す。

保楽
高平
宣光
興化
清
昇龍（トンキン）
アワ（アヴァ）
サルウィン川
シャン
ビルマ
チェンセーン
ルアンパバーン
シェンクワーン
清華
プアン
清潼
乂安
チェンマイ
ランパーン
鄭阜
帰合
ウィエンチャン
湛江
広平（ドンホイ）
ヤンゴン
ナコーンパノム
甘露
スコータイ
ピサヌローク
ターク
富春（フエ）
モッタマ
（マルタバン）
カンペーンペット
広南
シャム
ウボンラーチャターニー
チャイナート
ベトナム
ナコンラーチャシーマー
（コーラート）
チャンパーサック
ダウェー
（タヴォイ）
カーンチャナブリー
アユタヤー
ブラーチーンブリー
西山
帰仁
（平定）
トンブリー
バンコク
シェムリアップ
ラーチャブリ
チョンブリー
ペチャブリー
カンボジア
メコン川
ラヨーン
パッダンバン
チャオプラヤー川
ロンヴェーク
ウドン
プノンペン
サーデック
タイ（シャム）湾
嘉定（サイゴン）
河僊
美湫
フーコック島
龍川
堅江
バサック
嶌嵩島
ナコーンシータンマラート
タラーン
ソンクラー
パタニ
0
200km

図1　東南アジア大陸部

る史料はほぼ編纂史料である。したがって逐一史料を突き合わせ、考証を加えていくのが基本的な作業となる。

Ⅰ　チャオプラヤー・チャクリー、チャオプラヤー・スラシーと阮有瑞の講和

本章ではチャオプラヤー・チャクリー（のちの一世王）と阮福映勢力との関係がどのように始まったのかを検討する。

1779年、タークシン王が擁立したカンボジア王アン・ノーンを、チャオヴィエ・ムーとその要請を受けた阮福映軍が弑殺し、アン・エーン王を即位させた。1780年、タークシンの商船が広東からの帰路、河僊において守将に劫掠された。さらに王は、阮福映が当時トンブリーに逗留していた尊室春・鄭天賜と内応して、バンコクを奪うであろうという密書を入手した。王は激怒し、鄭天賜の子・鄭子沿を尋問して死に至らしめた。鄭天賜は自殺し、尊室春と阮氏の使者・参静ら53名は処刑された。翌年末、王は広南阮氏およびそれと結んだカンボジア勢力と戦うべく、チャオプラヤー・チャクリーとチャオプラヤー・スラシー（のちの副王）の兄弟、およびイントラピタック親王にカンボジアに軍を進めさせた。チャクリーはシェムリアップに駐留し、イントラピタックはウドンまで、スラシーはプノンペンまで進んだ。そこでスラシー軍は阮有瑞と胡文璘率いる阮福映軍と対峙した。

ところが、タークシンの圧政に対する反乱がアユタヤーにおいて勃発した。王はそれを鎮圧するためにプラヤー・サンを派遣したが、彼は叛徒と合流し、トンブリーに攻め込んだ。1782年3月10日（陰暦1月27日）にプラヤー・サンはタークシンを捕らえた。王は「我が徳は尽きた」と言い、出家を余儀なくされた。チャクリーの甥であり、コーラート（ナコーンラーチャシーマー）国主であったプラヤー・スリヤアパイはプラヤー・サンの反乱を知るや、チャクリーに連絡するとともにトンブリーに攻め込んだ。プラヤー・サンの軍と戦い、サン側についたアヌラックソンクラーム親王を囚えた。一方、連絡を受けたチャクリーは阮有瑞と講和して都に急行し、4月10日前後にタークシンを処刑した。プラヤー・サンらも処刑され

た[11]。

問題はその講和が成ったのが、プラヤー・サンの反乱が起きる前なのか後なのか、史料によって食い違っていることである。残念ながら本稿でもその時期を断定できないのだが、そのような問題が存在することを指摘するだけでも意義があろう。

『大南寔録正編第一紀』巻1、壬寅3年正月条（1782年2月12日–3月13日）、および『大南正編列伝初集』巻13、阮有瑞伝では、ロンヴェーク（羅壁）[12]で阮有瑞・胡文璘軍と対峙したチャクリー（質知）とスラシー（芻癡）は、タークシン（鄭国英）が理由なく妻子を囚えたことに怒り、彼らのほうから阮有瑞に接触して盟約を持ちかけている。阮有瑞はシャムの陣地に入り、チャクリーらに歓待され、事情が伝えられた。酒もたけなわになったところで矢を折って誓いを行った。阮有瑞は旗・刀・剣を贈って自陣に帰った。それから古落城（コーラートを指すが、古城つまりアユタヤーの誤り）で賊が蜂起し、タークシンがプラヤー・サン（丕雅寃産）に鎮圧に向かわせた。ところが彼は逆に叛徒（その長はサンの弟であった）と合流してバンコク（望閣）に攻め込んだ。タークシンは反乱が起こったのを聞いて仏寺に逃げるものの捕らえられた。サンはこれをチャクリーに連絡した。すでに阮有瑞と講和していたチャクリーは後顧の憂いなく帰京したという。ただし、人にタークシンを暗殺させ、その罪をプラヤー・サンに着せて拘禁のうえ殺したという記述はシャム史料に見られず、事実とは考えられない[13]。

---

(11) PC: 124–134; BM: 605v–610r; PP: 438–453; HL, vol. 2: 224–230; BR: 132–145.『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、159–161頁。『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本117–121頁、戴本239–242頁。『大南寔録正編第一紀』巻1、6葉裏、戊戌元年6月条、7葉裏、己亥2年6月条、10葉裏–11葉表、庚子元年6月条、14葉表、辛丑2年10月条、14葉表–15葉裏、壬寅3年正月条。Chen（1979）、北川（2006：168–169）。カンボジアの年代記（坂本訳、上田編2006：119–121）もシャムの年代記諸本とほぼ同じだが、異なるところもある。註21を参照。

(12) 本稿においてシャムの固有名詞はタイ語に従ったカタカナで表記し、ベトナムの固有名詞は漢字（ただしサイゴンなど一部はカタカナ）で表記し、必要に応じてもう一方の言語の史料上の表記を括弧内に記す。チャクリー（質知）、阮福映（オン・チェンスー）のごときである。ただし史料上の表記が問題となる場合や、それを優先すべき場合はこの限りではない。またタイ文字表記やクォック・グー表記を付すこともある。ビルマ、カンボジア、ラオスの固有名詞についても、各言語にしたがって表記するが、後二者については、タイ語史料またはタイ文字に翻字された史料における表記に従ったものもある。

(13)『大南寔録正編第一紀』巻1、14葉表–15葉裏、壬寅3年正月条。「壬寅三年【黎景興四十三年、清乾隆四十七年】春正月、命中營監軍掌奇阮有瑞率兵船、與胡文璘援眞臘。師

『大南寔録』に従えば、タークシンが失脚する以前に、チャクリーらはすでに敵対行動をとっていたことになり、政治史的に見逃せない。

それに対して、タークシンが収監されたという知らせを受けてから、チャクリーは阮有瑞と講和したとする史料が『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』と『嘉定城通志』である。

『鄭氏家譜』では、タークシン（鄭新）は日々人を打ち殺すようになり、また遠近の属邑において一律に家屋3間ごとに銀20銖を徴収し、支払えないものは投獄したため、怨嗟の声に満ちた。属邑の民は土賊となって、邑宰（チャオムアン）を殺害した。タークシンは鎮圧のためにプラヤー・サン（丕雅産）を古城（アユタヤー）に向かわせた。しかしプラヤー・サンは賊徒のなかにいた弟・昭某に説得されて、彼らと合流し、都を包囲した。タークシンは「我が福は尽きた」と言い、身を守らせるために金銀珠玉を子孫と妾に分け与えた。またプラヤー・サンに「今、我が運は終わりを告げた。しかし私は汝らの40余年来[14]の国王である。汝らはすでに天に従い、義を奉じているので、［私は］まさに我が天命を受け入れるべきである。寺に入って僧侶とならせて欲しい。私の子孫や妾、下女は害さないでくれ」と伝えた。叛徒たちは承諾し、タークシンは出家した。プラヤー・サンからの連絡を受けたチャクリーは夜を徹して帰京する一方で、スラシー（車匐仕）を留めさせ、ひそかに阮有瑞と通好させた。スラシーと阮有瑞は宝刀と指揮旗を交換して盟約とした。トンブリーに入城したチャクリーはター

次羅壁。會暹王鄭國英【一作鄭生】得心疾、囚質知芻癡妻子。質知・芻癡怨之。我兵至、乃會衆議。芻癡曰「我主無故囚我妻子。我輩雖出死力、誰其知之。不若與漢人請成結爲外援」。質知曰「此言正合吾意」。乃遣人詣有瑞軍、求成且邀至寨會約。有瑞許諾。暹使出。有瑞弟祐諫曰「蠻人多詐。恐有變、奈何」。有瑞曰「吾已籌之熟矣。暹王無故囚彼妻子。故彼欲借我爲援。此請殆不妄。況我已許諾、不往、彼將怯我」。明日帶領随兵數十人、徑入暹寨。暹兵相顧駭愕。質知・芻癡延待甚厚。具以情告。酒酣、折矢爲誓。有瑞因以旗刀劍三寶器贈之、而回。會暹羅古落城賊起。鄭國英遣丕雅寃産出征。賊首黨乃寃産之弟。寃産遂合兵倒戈反攻望閣城。城内人開門納之。鄭國英聞難作、逃于佛寺。寃産執而囚之、馳告質知回國。質知得報、以爲既與有瑞議和、無後顧憂。遂連夜引兵回望閣城。將至、暗令人殺鄭國英而嫁罪于寃産、暴揚罪惡、責其作亂。鎖禁別室、尋殺之。遂脅衆而自立爲暹羅王、號佛王。【暹俗尚佛。故以佛稱。】封其弟芻癡爲二王、姪摩勒爲三王。我國難民、前爲鄭國英流徙者、皆放回望閣、給銀米養贍。有瑞以狀聞。帝命班師」。【　】内は割註。以下同じ。『大南正編列伝初集』巻13、阮有瑞伝、5葉表裏、胡文璘伝、13葉裏も簡略ながら異なるところはない。

(14)　在位期間ではなく年齢を指すと思われる。

クシンを城門に引き出させて処刑した[15]。

『嘉定城通志』も、『鄭氏家譜』よりは簡略ながら、おおむね同様の展開を記している。ただしイントラピタック親王（後述）に言及しない。また反乱が起きたのを古落城とするのは誤り。チャクリーが政変を知り、阮有瑞と講和したのを陰暦3月（4月13日–5月11日）とするが、これではタークシンの処刑後のことになってしまう[16]。ただし誤伝とはいえ、講和の時

---

(15)『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本119–121頁、戴本241–242頁。「新盡驅逐我民于荒原遠地、命質知及其弟轎仕、往争拠高綿地。又遣其子六書爲帥將往督之。越本月二十四日、皇太弟及公子孫臣僚等三十六人被害。并殺東山使臣二員、又殺該奇糝、副（戴本：付）奇淨及從軍十七人。自後鄭新大發狂燥、日日打殺彼民不息。又籍（陳本：藉）諸居民坊房屋、每三間收銀二十銖、各遠近屬邑亦一概收索、無銀者拘打、監于竹牢。萬民洶洶、怨（戴本：惡）声塞（陳本：載）道、而鄭新不悔。且曰「天命在我、彼如我何哉」。屬邑民皆反爲土賊、突殺邑宰。警（陳本：驚）報鄭新、遣内臣丕雅産往古城破賊。産至古城、賊酋（陳本：首）即産之親弟昭某、率衆圍之、曰「當今國王狂悖、不可爲民上、我既與衆約誓、除暴君以活民命、擇有德屬我族類者尊之、以報（陳本：復）我國。彼唐族安望其能終撫育乎。兄當熟計之。不然、城破之日、悔之何及、弟敢越衆而自私乎」。産曰「當義而行、何逆之有」。遂反命從軍諸隊作向導、土賊民從之、蔽原塞（陳本:寨）江直下、至鄭新城圍之。城内軍聞警、皆縋城而出。新自知命窮身困、啓倉庫取金銀珠玉等物、分許諸子孫婦妾曰「我福没矣。汝等收此爲護身之需」。再命宮温［媼？］通言于産曰「今我運告終。然我曾作汝等四十餘年國王。汝等既順天奉義、當容我性命。請入本寺爲僧。凡我子孫妾媵、毋相害」。衆允許之。太早開城門、兵民盡入。新既剃髪爲僧（陳本:缺「凡我子孫…爲僧」）。産入府庫、取出銀子十餘箱、給發從民、餘封守。馳報質知兄弟詳知。越三日、新使其侄潛出、誘民反攻不克、其侄被戮。新潛出不出、被我南民監守獲（陳本：護）之。産怒作五層鐵拘摯于竹牢、令嚴守之。質知得産書、遂撤兵夜退回城、使其弟轎痴留後、密與監國瑞通好、奉交寶刀一口爲質。國瑞取指揮旗一幅交來、約以日後誅鄭新、辰示此爲信。潛引兵退、質知入城、遂數鄭新之罪、因何誅戮官吏、殘害百姓、爲君不仁、罪悪盈天、應服天誅、命衛士引出城門殺之。諸官掃清宮殿、共尊質知即王位。轎痴兵回至城、遂尊爲二王、其侄摩勒爲三王。暹國咸安静。

辰六書聞凶信、將兵回至邦康地。國民入報、二王提兵出拒。辰六書之兵、父子妻児皆在城中、通知無恙、遂反戈投入二王麾下。六書勢窮拜降、二王拘于囚車遞回、大王命戮之于市。即赦（陳本:釋）放我難民回城、惠給銀米、使舊吏管之、亦命撻齒多提水兵來争我河僊」。［　］はテキストにある補訂。（　）内は引用者による校勘。

(16)『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、160–161頁。「壬寅五年【黎顕尊景興四十三年、西山賊阮文岳泰德五年、大清乾隆四十七年】春正月、朝命調遣掌奇瑞應侯阮有瑞擧兵赴援。時丕雅新苛暴狂悖、動加殺戮、民不聊生、群盗四起。惟古落城賊甚猖獗、丕雅新遣大將丕雅寃産出兵征之。賊城首將乃寃産胞弟、諭陳暴君弊政、臣民離叛、若不先事改圖、必爲魚肉。寃産許諾、遂合兵倒戈、向望閣城攻圍、衆皆左袒、俘獲丕雅新囚之、發庫銀犒賞起義將卒、馳請質知兄弟回國商議。三月質知得報、即令其弟芻癡留後、與瑞應侯講和、自率爪牙衛兵星夜馳回望閣、數丕雅新罪悪、殺之、暴屍城外、以謝國人。質知遂即暹佛王位【暹俗重佛、以大王爲佛王、猶中國敬天、稱王爲天王。】芻癡後回、進爲二王、封其侄摩勒爲三王。其從前我越難民爲丕雅新流配者、皆赦免抽回望閣安置、惠給銀米養贍、以寃産擅発庫銀、囚之、寃産憤死、亦疑忌之所致也。質知爰差將撻齒多來占河僊地」。

期が陰暦3月に近かったことを示唆するのかもしれない。

モーラコットウォンが言うように、現存するシャム史料のなかにこの講和に言及するものは存在しない[17]。ただしそれを仄めかす史料はある。パン・チャンタヌマート本と大英博物館本には、スラシーがカンボジアから撤退するにあたって、プノンペン島に駐留するイントラピタック親王の帰京を阻むためであろう、「クメール3万、ユアン（ベトナム）8000に包囲させた」とある[18]。この「ユアン8000」が阮有瑞・胡文璘軍と考えられ、講和の存在を示している。

年代記諸本では、のちにこのイントラピタック親王は包囲を破ってプラーチーンブリーまで戻ってくる。しかし兵が次々に逃亡し、ついに親王含めて7名となって、パタウィー近くのカオノーイなる地に潜んでいたところを、4月28日にスラシー軍に捕らえられた。5月4日に親王は処刑されたという（PC: 133–134; BM: 610r; PP: 452–453; HL, vol. 2: 231–232; BR: 150–151）。

ベトナム史料で唯一この事件を記すのが『鄭氏家譜』である。すなわち、六書（イントラピタック）は父王倒さるの凶報を聞くや、兵とともに邦康の地まで戻るが、副王（スラシー）の軍が行手を阻んだ。イントラピタックの兵は、都に残した父子や妻から無事を知らせられると、副王軍に投降した。親王も降らざるを得ず、副王に捕らえられ、一世王の命令によって

---

(17) Morragotwong 2001: 36–37. なお氏は『大南寔録正編第一紀』と『ポンサーワダーン・ユアン（ベトナム年代記）』を依拠史料として挙げつつ講和を描いているが、実際にはほぼ後者に依存している。しかし講和に関するかぎり、この史料は『嘉定城通志』『鄭氏家譜』より『大南寔録』に近いものの、それとも大きく異なっている。すなわち、阮有瑞の方からチャクリーに講和を持ちかけている。面会に際して、彼はチャクリーに王者の威風を見出す。阮有瑞はシャム・ベトナムがともにカンボジアを保護下に置くことを提案し、チャクリーの同意を得ている（Yǭng (tr.) 1966 (1899): 383–388）。この事件についての当該史料は信頼に値しない。

なお『ポンサーワダーン・ユアン』とは、1899年に砲兵部隊のナーイ・ヨーンがベトナム史書からタイ語に翻訳したものである。貉龍君、雄王から始まり、1890年までを記す。序文に当たる詩に底本らしき書名として*เวียดนามสือกี๋ Wiatnām sūkī*（『越南史記』か）が見えるが、詳細は不明。

(18) PC: 133; BM: 609v–610r. なおPP: 452; HL, vol. 2: 231; BR: 149–150ではプッタイペット（ウドン）でクメール3000に包囲させたとあり、ユアン8000を欠く。おそらくこれらの年代記が編纂された頃までには、このユアンが何者なのか分からなくなっていたため、編者によって削除されたのであろう。

市において処刑されたという[19]。邦康とはプラーチーンブリーの別名バーン・カーン（บางคาง Bāng Khāng）であろう[20]。

このようにシャム史料との一致という点では、『鄭氏家譜』に一日の長がある。年代記諸本では、チャクリーはシェムリアップに、スラシーはウドンに駐留している。そのためチャクリーとスラシーが阮有瑞と面会する『大南寔録』よりも、チャクリーがスラシーに阮有瑞と講和させたと読める『鄭氏家譜』『嘉定城通志』のほうがシャム史料と矛盾しない。『鄭氏家譜』のみが古落城ではなく古城に作る。タークシンの出家とイントラピタック親王に言及している点も特筆に値する[21]。そのため、現段階で筆者は『鄭氏家譜』が事実に近いでのはないかと考えている。しかし対応するシャム側の史料がないため、講和の時期を確定するには至っていない。

以上のように講和の時期についてはなお問題を残すが、阮有瑞が講和に応じたおかげで、チャクリーは後顧の憂いなくタークシンの排除に動くことができたことは間違いない。一世王は阮福映一党に恩義があったのである。

---

(19) 註15参照。

(20) 『暹羅国路程集録』陸路上路、27頁に「邦疆茫」という地名が見え、陳荊和と木村宗吉によって“Bang Cơng Mương: Prachinburi”と註記されている。

(21) 一方で『鄭氏家譜』に問題がないわけではない。他の2史料と同様、プラヤー・サンがチャクリーに連絡したとするが、年代記諸本には見えず、プラヤー・スリヤアパイが報告している。また『鄭氏家譜』にある「新使其侄潛出、誘民反攻不克、其侄被戮」の「其侄」というのは、タークシンとともにサンに囚えられたアヌラックソンクラーム親王（タークシンの母方の親族と考えられている）のことかもしれない。しかしタークシンがひそかに甥を出し、甥は民を誘って反抗したが、勝てずに殺された、という『鄭氏家譜』に反して、サンに解放されたアヌラックソンクラーム（おそらくサンが神輿として担ぎ出したものと思われる）はサンの一党とともにプラヤー・スリヤアパイと戦って囚えられ、のちチャクリーに処刑された。以上については、川口（2015：21，註174，175）も参照。

また3史料とも、叛徒の首魁または叛徒の1人がサンの弟であったとするが、これはシャムの年代記諸本にはなく、サンの弟がルアン・テープという名であったことしか記されていない（PC: 129;BL: 607v; PP: 446, 451; HL, vol. 2: 228, 231; BL: 139, 147）。ただし『ナリントラテーウィー内親王覚書』に対応する記事があり、アユタヤーの民衆とともに反乱を起こしたクン・ケーオが、鎮圧のために派遣された兄のプラヤー・サンを捕らえ、司令官に推戴したとある（Narinthrathēwī 2003: 67–68, 251–253, 778–779）。カンボジアの年代記には、弟が叛徒であった記述はないが、やはり弟khun kaevがサンを説得したとある（坂本訳、上田編2006：119）。疑心暗鬼になっていたタークシンが、なぜ弟のいる反乱の鎮圧のためにその兄を派遣したのか疑問ではあるが、これらから、このエピソードが事実である可能性は十分にある。

Ⅱ　阮福映のバンコク亡命

よく知られているように、阮福映は西山軍に嘉定を落とされたのち、バンコクに亡命するのだが、ベトナム史料はその時期を1784年陰暦3月とする一方で、シャム史料は小暦1144年（1782/3年）とする。まずは『大南寔録正編第一紀』巻1から巻2を中心にベトナム史料[22]を見てみよう。

1782年陰暦3月、阮福映は阮文岳・阮文恵に攻められ、一時嘉定を失陥する。陰暦4月に阮有瑞らが救援要請のためにシャムに派遣されるが、途中、西山側に付いたクメール人に殺された。阮福映はフーコック島に逃れていたが、陰暦8月に朱文接が嘉定を回復し、映も帰還した。阮福映は西山の侵攻に対抗するために、黎福曄と黎福評をシャムに派遣し、金銀樹（金花銀花）を送って好を通じさせた。

翌1783年陰暦2月に西山軍によって再度嘉定が落とされ、阮福映は母をはじめとする親族とともに海上に脱出した。またそれに先んじて朱文接をラオス経由でバンコクに派遣していた。1784年陰暦2月（『嘉定城通志』では1783年陰暦12月）、一世王は朱文接の要請に応じて、阮福映を救援すべく撻歯多[23]を海軍とともに向かわせた（『嘉定城通志』も同じ）。『鄭氏家譜』では六崑と沙苑、およびカンボジアの旧臣チャウヴィエ・バエン（昭鐘卞）[24]を陸路で派遣し、また大臣に映を迎えに向かわせたとある。これを知った映は龍川に移動し、そこでシャムの部将と会った。彼らの要請に従って、阮福映はシャムに向かった。バンコクに到着したのは1784年陰

(22)　『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、161-162頁、『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本122-123頁、戴本242-243頁との違いは本文で言及する。

(23)　『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本121頁、戴本242頁と『嘉定城通志』巻3、161頁では、王朝交代直後に一世王はこの撻歯多を河僊占領のために派遣している。註15、16参照。これはプラヤー・ラーチャーセーティーに代えて、プラヤー・タッサダーをプッタイマート（河僊）守備のために派遣したとする『ラタナコーシン朝年代記』小暦1145年（1783/4）の記事（PRPR1: 21-22; DC, vol. 1: 49）と対応する。プラヤー・ラーチャーセーティーは鄭子泩のことであろう。

(24)　タイ語ではチャオファー・ベーン。1782年、カンボジアの内訌によって主君のアン・エーン王とともにバンコクに亡命した。翌年に一世王はバエンをチャオプラヤー・アパイプーベートの位階・欽賜名を与えてバッタンバンに赴任させ、カンボジアの統治を任せた。1788年に、バエンはサイゴン―メコン川―プノンペンに拠って西山と結んでいたカンボジア勢力を倒した。1794年に一世王がアン・エーンを帰国させ即位させると、バエンはシャムの支配下に入ったバッタンバンを治めた。北川（2006：179-184）参照。

暦3月（4月20日–5月18日）のこととされる。一世王と副王は阮福映を歓迎するとともに、阮有瑞と講和した際に信頼の証として交わした旗や刀剣などを取り出して、謝意を示しつつ助力を申し出た。

一方、『ラタナコーシン朝年代記』小暦1144年条では、一世王がプラヤー・チョンブリーとプラ・ラヨーンに偵察させたところ、彼らはクラブー島で嘉定から脱出していた阮福映（オン・チェンスー）[25]と出会った。当初、彼らは阮福映にシャムに亡命することを勧めるが、かつて叔父の尊室春（オン・チェンスン）をタークシンに処刑されたことがある映は亡命を渋った。しかしプラヤー・チョンブリーが、すでに国王は交替しており、現在の王は人民に慈悲深い、と説得した。そこで映はプラヤー・チョンブリーの養子となって、チョンブリー経由でバンコクに至った。小暦1144年4月白分（1783年3月3日–17日）のことという。翌小暦1145年（1783/4年）に、一世王は阮福映のために嘉定を奪回すべく、プラヤー・ナコーンサワンにカンボジア経由で軍を進めさせた。彼はサーデックにおいて西山軍に勝利するも、部下の讒言によってバンコクに召還され、処刑されたという（PRPR1: 33–34, 45–47; DC, vol. 1: 34–35, 56–58）。

以上のような『大南寔録』と『ラタナコーシン朝年代記』の相違について、エーランドはそれを指摘するものの、『ラタナコーシン朝年代記』に依拠して経緯を描いている（Eiland 1989: 36–38）。モーラコットウォンは両者を依拠史料に挙げつつ、時期を1784年とする一方、『ラタナコーシン朝年代記』に基づいて阮福映はプラヤー・チョンブリーの勧めでバンコクに亡命したと述べる（Morragotwong 2011: 38–39）。しかしなぜそう言えるのか説明がない。唯一史料間の相違を整合的に説明しようとしたのは、ローゼンベルクのみである。シャム史料に見える、1782年（マ）（マ）における阮福映のバンコク亡命は、映が一時的に嘉定を失陥し、フーコック島に逃げていた同年陰暦4月から8月に当たるという（Rosenberg 1975: 105–106）。

しかし上述の通り、『ラタナコーシン朝年代記』は映のバンコク到着を小暦1144年4月白分（1783年3月3日–17日）と明記しており、氏の推論

(25)　オンはベトナム語の男子尊称ôngであり、チェンスーは阮福映の官名の掌使（Chưởng sử）に由来する（桜井1979：115）。

はこれと矛盾する[26]。

現存するシャム史料のなかで、映の亡命に関するもっとも古いものは、一世王の妹の手になる『ナリントラテーウィー内親王覚書』であろう。その小暦1144年条に、

> 年末にオン・チェンスーが威徳のもとに来た[27]。

とある。小暦年はグレゴリオ暦4月のどこかで変わるので、年末というのはグレゴリオ暦3月とその前後であり、『ラタナコーシン朝年代記』の記述と一致する。「威徳のもとに来た」とは一世王の庇護下に入ったことを意味する。しかしこの史料は阮福映がバンコクまでその身体を運んだことを具体的に記しているわけではない。むしろこの史料は上述のように、1782年陰暦8月に阮福映がシャムに派遣した黎福暕と黎福評のことを指しているのではあるまいか。彼らは臣従を意味する金銀樹を持ってきているので、「威徳のもとに来た」という表現にも合致する。ただし嘉定からバンコクまで約半年かかっているのは気になるところである。しかし翌年に朱文接が嘉定からラオス経由でバンコクまで行くのに約1年を要しているので、約半年というのも許容範囲であろう。

『ラタナコーシン朝年代記』よりも古いプラ・ポンナラット本、ブラッドレー本、宸筆本は、亡命時期をやはり寅年（小暦1144年）とするものの、阮福映をバンコクに招いたシャムの官僚をプラヤー・チョンブリーとプラ・ラヨーンではなく、プラヤー・ラーチャーセーティーとプラヤー・タッサダーとする。タッサダーは『大南寔録』と『嘉定城通志』に見える、朱文接の要請に応じて一世王が派遣した撻歯多（Thát Xỉ Đa）に当たる。またプラ・ポンナラット本、ブラッドレー本、宸筆本、『ラタナコーシン朝年代記』に見える、小暦1145年（1783/4年）のプラヤー・ナコーンサワンの記事[28]は、やはり朱文接の要請によって陸路を進軍した六崑沙苑（Lục Côn Sa Uyển）のことであろう。『鄭氏家譜』は六崑と沙苑の二臣とするが、

(26) PP: 463; HL, vol. 2: 239; BR: 163は寅年（小暦1144年）とのみ記す。
(27) Narinthrathēwī 2003: 71, 272, 783. “ฉบลายปีองเชียงสือมาสู่โพธิสมภาร”
(28) PRPR1: 45–47; DC, vol. 1: 56–58; PP: 466–467; HL, vol. 2: 241–242; BR: 167–168.

もともと六崑沙苑でナコーンサワン1人を指していたに違いない。

以上からシャムの年代記諸本は、1783年にバンコクに至った阮福映の使者を映自身の亡命と混同しているものと思われる。朱文接の要請を受けて、1784年始めに一世王はプラヤー・タッサダーを海路で、プラヤー・ナコーンサワンを陸路で派遣した。タッサダーが阮福映に出会ってバンコクに招いたものと考えられる。

Ⅲ　亡命期の阮福映と一世王政権

一世王政権にとって阮福映とその一党とはどのような存在であったのだろうか。それを意識しつつ、亡命期の阮福映について簡単に見ておこう。

1784年半ば、さっそく一世王は嘉定を落とすために、甥のクロマルアン・テープハリラク親王を総司令官として兵5000と阮福映とともに海路を進ませた。陸軍はプラヤー・ウィチットナロンを司令官としてカンボジアを進み、チャオプラヤー・アパイプーベート[29]のクメール軍5000と合流した（PRPR1: 47–48. DC, vol. 1: 60–61）。『大南寔録正編第一紀』巻2、甲辰5年6月条では、一世王は甥の昭曾・昭霜に兵2万、軍船200艘を率いさせたという。テープハリラクの本名はタン（ตัน Tan）なので、昭曾（Chiêu Tằng）はチャオ・タン（เจ้าตัน Čhao Tan. チャオは尊称）に当たり、彼を指す。ただしこの遠征に彼以外の王族の参加は認められず、昭霜（Chiêu Sương.『鄭氏家譜』は昭張Chiêu Trươngに作る）が誰なのか不明である。なおこのとき、タークシンによる殺害を免れた鄭天賜の子の1人、鄭子泩が阮福映に従った。『ラタナコーシン朝年代記』でもプラヤー・ラーチャーセーティー（鄭子泩）率いるプッタイマート（河僊）軍が阮福映に合流している。

このシャム・阮福映連合軍は、翌1785年1月18日、美湫付近で阮文恵軍と激突して大敗した（ラックガム・ソアイムットの戦い）[30]。阮福映は

(29)　チャウヴィエ・バエンのこと。註24参照。

(30)　『大南寔録正編第一紀』巻2、12葉表–15葉裏、甲辰5年6月–12月条。『河僊鎮叶陳鄭氏家譜』陳本124–128頁、載本243–246頁。『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、163頁。PRPR1: 48–49; DC, vol. 1: 61–62; PP: 467–468; HL, vol. 2: 242–243; BR: 168–169. Eiland（1989：38–43）も参照されたい。

手勢わずかに200人、船5艘とともにバンコクに帰還した。彼は龍邱に住み、母を始め親族を呼び寄せた。龍邱はタイ語で「芋原」と言い、バンコク城外北方にあるバーン・ポー（บางโพ Bāng Phō）に比定されている（Poole 1970: 25; 桜井1979：75, 115）。先の戦いに参加した黎文勻が600人を率いて帰還するなど、日に日に将士は増えていった(31)。

1785年末から翌年にかけて、ビルマ軍が大挙してランパーン、タ－ク、カーンチャナブリー、タラーンなどに侵入した。このとき阮福映もシャム軍に参加したことはシャム・ベトナム双方の史料に見える。『大南寔録』などによれば、阮福映とその配下の黎文勻と阮文誠は、柴諾（Sài Nặc. チャイナートか）において火器を駆使してビルマ軍に大勝し、捕虜500人を得たという。副王と黎文勻はパタニにまで攻め込み、これをシャムに服属させた(32)。

ここからシャム宮廷にとって阮福映一党がどういう存在であったかを窺うことができる。このときビルマ軍は『コンバウン朝大御年代記』によれば13万4000人、『ラタナコーシン朝年代記』によれば10万3000人、対してシャム軍は4万8000人であったという（KBZ, vol. 2: 34–36; PRPR1: 62–64, 65–66; DC, vol. 1: 87–90, 91–92）。この数の正誤はともかく、スコータイ、

---

(31) 『大南寔録正編第一紀』巻2、16葉表–17葉裏、乙巳6年3月–5月条。『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、163–164頁。

(32) PRPR1: 89. ダムロン改訂本に基づくDC, vol. 1: 120は阮福映がビルマとの戦いに従軍したと明記せず。『大南寔録正編第一紀』巻2、18葉裏–19葉表、丙午7年2月条。「二月緬甸三路兵侵暹柴諾【地名】。暹王親禦之。請帝計畫。帝曰「緬甸擧兵、遠來千里。餽餉亦已勞矣。吾爲之助速戰、必克」。暹王卽進兵。帝親率從軍助戰、令黎文勻與阮文誠前進。以火噴筒攻之。緬甸兵驚走。死者無算、俘獲五百人。暹王嘆服。及還、奉金帛爲謝。嘗欲再爲帝助兵收復嘉定」。同19葉裏–20葉表同3月条。「闍婆來攻暹。帝命黎文勻率水兵與暹二王討平之。暹王重勻將才、禮遇甚厚」。

『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本129頁、戴本247頁。「丙午年冬花肚國擧大兵七路入寇。暹國大王令（戴本：命）二王出中道、大王將上道拒之。辰上御駕在臺匿地面扎（陳本：札）屯助之。暹王命大庫官侍蹕。二王兵大破花肚兵、走回六崑收兵回城、二王提水戰艅船百餘艘追之、上命前軍勇侯率本兵随二王追殺、二王至宋脚擒獲花肚千餘人、盡殺之。因擧兵入闍閻地、卽大年、攻破之、收得銅礮（戴本：炮）一口長二丈、竝拘取女子人民帶回暹城」。臺匿はチャイナートか。宋脚はソンクラー。大年はパタニ。

『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、164頁。「又分命諸將、或助暹王征緬甸于柴諾【乙巳年六月、緬甸攻暹羅于柴諾。暹王請助、上親往、以熧克之、緬甸惊走】、伐闍閻于座呢【唐商稱大年、在西南海島、爲暹羅屬國。不恭臣職、丙子年、暹王求我助兵、欽命前軍勇郡公同暹二王討平之】。或就海島修造船艘、或潛出嘉定招募義兵、圖興復計」。座呢はパタニ。

ピサヌローク、カンペーンペット、タークの国主たちは戦わずに逃げてしまった（PRPR1: 74; DC, vol. 1: 104）。くわえて王朝成立当初、ペチャブリーより南には支配が及んでいなかった[33]。つまり一世王政権は南部と北部の人員はほとんど動員できなかったのである。阮福映麾下の兵力ははっきりしないが、上述のように阮福映の手勢が200人、黎文匀の配下が600人、そこから増えたとすれば、総数1000人ぐらいであろうか。『大南寔録』などに見える阮福映軍の活躍は『コンバウン朝大御年代記』では確認できないので、誇張かもしれないが、地方の兵力を十分に動員できない一世王政権にとって阮福映軍はやはり貴重な戦力であったのだろう。

一世王政権は多くの非シャム人を使役していた。大抵は戦争捕虜として連行されてきたもので、彼らにはビアワット（年給）が支払われていた（Koizumi 2015: 177–179）。阮福映は一世王から賓客として遇されていたため、彼らとは異なるものの、同じように映の一党もビアワットを王から受け取っていた（PRPR1: 33–34; DC, vol. 1: 35–36）ことから、それに近い位置づけであったことが窺われる。あるいはアユタヤー時代の常套手段であった外国人傭兵の一種であったと言えるのかもしれない[34]。

同時に、このときからシャム宮廷にとって阮福映は対ビルマ戦における協力者となった。そのような関係はそののちも、そして阮朝成立後もシャム宮廷から期待されることとなる。

---

(33)　王朝成立直後に国主が任命されたマレー半島の地方国はラーチャブリーとペチャブリーのみである（川口2015：30）。マレー半島にバンコクの支配が及ぶのはこの1786年のビルマとの戦争のなかにおいてであった（PRPR1: 78–82; DC, vol. 1: 109–118）。

(34)　Poole（1970:24）によれば、阮福映は亡命中に一世王に姉妹を嫁がせたという。しかし『大南正編列伝初集』巻3、公主列伝、1葉表–5葉裏を見る限り、阮福映の4人の姉妹はそれぞれ劉福晛、武性、阮有瑞、宋福信に嫁いでおり、かかる事実は確認できない。『大南寔録正編第一紀』巻20、17葉表裏、嘉隆2年2月条に、映の叔父・尊室春の娘・玉璁がシャム王に嫁いでいたとあり、彼女の誤りであろう。

一方で浙江巡撫を務めていた阮元の年譜『雷塘庵主弟子記』巻1、嘉慶5年12月条、36頁、1796年に捕らえられたベトナム海賊の総兵・范光喜の供述のなかに、「黎氏之甥阮種卽阮福映。奔暹羅。暹羅妻以女弟、助之」とあり、暹羅（の王）が阮福映に妹を嫁がせたという。しかしこれはBančhœt (ed.)（1996：179–185）を見る限りでは確認できない。

Ⅳ　阮福映のバンコク退去と嘉定奪還

1786年、西山は北部の鄭氏政権を滅ぼし、黎朝皇帝に北河（ベトナム北部）の支配権を返還した。しかし阮文岳と阮文恵が対立し始め、岳は帰仁に割拠し、阮文呂に嘉定に駐留させた。一方阮文恵は富春に割拠し、岳と争った。兄弟の対立を知った阮福映は、シャム宮廷が西山を恐れて役に立たないため、1787年8月13日、置き手紙を残し、夜に乗じて親族・配下とともにバンコクを去った(35)。

『ラタナコーシン朝年代記』では、阮福映の脱出を知った副王が船に乗って彼を追っている。阮福映の船はシャム湾まで到達するものの、風が吹いていなかった。そこで映は紙を焼いて神を祀り、もし自身が国を取り返すことが叶うのであれば、風を吹かせよ、と願ったところ、見事風が吹き始め、海上への脱出に成功した。一方、阮福映を取り逃がした副王は都に戻り、一世王に軍船をもって追捕すべきことを説くが、一世王は阮福映の置き手紙に誠意あるを認め、追う必要はないとした。すると副王は、もし阮福映を捨て置けば、将来我らの子孫に苦難をもたらすだろう―1830-40年代の戦争のこと―、と一世王に忠告したという(36)。

いかにも後代に創られたエピソードである。ただし副王が船で追ってきたのは『大南寔録』にも見え、事実であろう。しかし年代記と異なり、ベトナム史料から見える副王は、むしろ阮福映一党と縁が深く、また好意的な人物である。すでに見てきたように、一世王はともかく、副王は確実に阮有瑞と面識がある。また黎文勻らと戦場をともにした。タークシンが鄭天賜を殺害したときに、難を免れた鄭氏の一族を保護していたのも副王であった(37)。副王が阮福映を連れ戻すために追ってきたとしても、それは対ビルマ戦において貴重な戦力が流出するのを惜しんでのことではなかろう

(35)『大南寔録正編第一紀』巻3、2葉表裏、丁未8年7月丙寅条、『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、164頁、『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本129-130頁、戴本247頁。嶋尾（2001：290）も参照。

(36)　PRPR1, pp. 89-93; DC, vol. 1, pp. 120-124. ただし同史料がこの記事を小暦1148年条（1786/7年）に置くのは誤り。またPP, pp. 491-492; HL, vol. 2, pp. 264-265; BR, pp. 207-209は風を吹かせるエピソードを欠く。

(37)『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』陳本124頁、戴本243頁。

か。

阮福映はシーチャン島（竹嶼）に移り、そこでシャムの商船を襲って乗組員をすべて殺した部下を処刑し、その首をシャムに届けた[38]。一世王は人を派遣して謝意を示した。この出来事は『ラタナコーシン朝年代記』小暦1149年条（1787年）にも見えるが、処刑されたのは海賊で、映がクート島（古骨嶼）に移動したのちのこととされる（PRPR1: 101–102; DC, vol. 1: 137）。

年代記（以下、年代記とは『ラタナコーシン朝年代記』を指す）は続けて、オン・ホートゥアンドゥック（องโหเตืองดึก ‘Ong Hō Tūang Dưk）とオン・トンユンヤーン（องทงยุงยาน ‘Ong Thong Yung Yān）の兄弟が阮福映を追ってラオスから来たとする。ホートゥアンドゥックは阮黄徳のこと。西山に捕らえていたが、1786年に脱出し、乂安からナコーンパノム（楽凡）、ウィエンチャンを経由してバンコクに至ったが、すでに阮福映は退去していた。ただしオン・トンユンヤーンはベトナム史料に見られない[39]。

さらに年代記によれば、同年9月黒分12日（1787年9月9日）に阮福映がカーイダーオを使者として、チャオプラヤー・プラクラン（大蔵・港務大臣）に宛てた書簡を届けた。無断でバンコクを去ったことを詫びるとともに、船・銃・火薬の貸与を要請した。一世王は銃と火薬を送らせるとともに、阮黄徳のことを通知させた。この通信は『大南寔録』には見えないが、ありえないものではなかろう。翌小暦1150年7月黒分7日（1788年6月25日）に、阮福映はカーイドーイダーオを派遣して返信を送った。阮黄徳らの帰還と銃・火薬の追加送付を要請した。一世王は銃・火薬とともに軍船を阮黄徳とオン・トンユンヤーンに各1隻を与えて行かせたというが、後述のごとく、阮黄徳が帰国したのは翌1789年陰暦正月と思われる[40]。

1788年9月7日（陰暦8月丁酉）に阮福映は嘉定を奪還した。映は阮文

(38) 『大南寔録正編第一紀』巻3、2葉表裏、丁未8年7月丙寅条。

(39) PRPR1: 101; DC, vol. 1: 137.『大南寔録正編第一紀』巻4、3葉裏–6葉表、己酉10年正月条、『大南正編列伝初集』巻7、阮黄徳伝、11葉裏–13葉表。

(40) PRPR1: 101–102, 111–112; DC, vol. 1: 137–139, 149–151 カーイダーオ（กายดาย Kāi Dāo）とカーイドーイダーオ（กายโดยดาว Kāi Dōi Dāo）は同一人物か。カーイドーイは該隊（Cai đội. 武官の官名のひとつ）であろう。

閑と宋福珠などをシャムに遣使して勝利を伝えた。この使者が齎した書簡は年代記の10月黒分13日条（9月27日）に見える[41]。

年代記では続けて、シャム暦12月（10月末–11月）に阮福映がオン・ボーホー[42]を派遣して金銀樹と書簡を届けて言う。アーイ・チェンサム（อ้ายชียงซำ ‘Āi Chiang Sam. アーイは名に冠する蔑称）がバサックに逃れているので、これを討つために軍船30艘、船の首尾に艤装する火器と火薬を送付し、あわせてチャオプラヤー・アパイプーベートにクメール軍3000人を率いさせて寄越してほしい、と。一世王は破損している船ばかりなので、軍船5艘を火器70丁・火薬とともに映の使者とオン・ホートゥアンドゥック（阮黄徳！）、オン・カイチャットに引き渡した。またアパイプーベートに出陣させた。アーイ・チェンサムは映に降伏したのち、映はプラヤー・チャクリー・ケープにバサックを守らせたという（PRPR1: 113; DC, vol. 1: 151–152）。

アーイ・チェンサムとは、嘉定を守っていたが、阮福映に敗れてバサック（巴忒）に逃げて抵抗していた西山の部将・范文参のこと。翌1789年陰暦正月に阮福映に降った。映はクメール人の伽知甲にバサックを管轄させた。これがプラヤー・チャクリー・ケープ（クメール語ではオクニャ・チャクレイ・カエプ）である[43]。

他方で『大南寔録』には、映は嘉定を奪還したのちに、阮黄徳がシャムにいることを聞き、人を派遣して彼にシャム王から軍船と兵を借りて帰国するように指示したとある。これが先のシャム暦12月の阮福映の書簡と考えられる。徳はシャム王から与えられた船50艘と硫黄・硝石・火器とともに、翌1789年陰暦正月に嘉定に戻った[44]。しかし船の数の桁が年代記と異なる。年代記の5艘のほうが現実味があろう。いずれにしてもこのような軍需物資の支援はその後も続く。

そのような支援を引き出すためであろう、阮福映は臣従を示す金銀樹（金

(41) 『大南寔録正編第一紀』巻3、14葉裏、戊申9年8月丁酉条、19葉裏、同8月条。PRPR1: 113; DC, vol. 1: 151–152.

(42) องโบโฮ ‘Ong Bōhō. ボーホーは保護（Bảo hộ）の訛音であろう。しばしばシャムに遣わされた管後水営保護の阮文閑のことと思われる。

(43) 『大南寔録正編第一紀』巻3、18葉裏、戊申9年8月条、巻4、8葉表、己酉10年3月条。伽知甲と関連するカンボジア情勢については、北川（2006：180–182）参照。

(44) 『大南寔録正編第一紀』巻4、3葉表–6葉表、己酉10年正月条。

花銀花）をたびたび一世王に贈った[45]。そのほか1789年陰暦4月には、飢饉に陥ったシャムの要請に従って、映は米8800余方（牛車200台分に相当）を一世王に送っている。米の支援は1793年にも行われた[46]。また1789年に、パタニが阮福映に遣使し、シャムを討つために援軍を要請した。映はシャムとの友好関係ゆえに、贈り物を受け取らず、使者を帰した一方で、これをシャムに通報した。先行研究が阮福映と一世王との蜜月関係を示す一例として好んで取り上げる出来事である[47]。と同時に阮福映政権の海洋的性格と、その勢いがすでにパタニにまで知られていたことが窺われる。

V　阮文恵軍のウィエンチャン侵攻

同時期に阮文恵はベトナム北部を完全に掌握し、1788年陰暦11月に帝位に即き、年号を光中と定めた。同年末に清に亡命した黎朝の昭統帝の要請により清軍が侵攻するが、1789年始めに阮文恵はこれを退けた。ただしすぐに清朝に降伏の表文を送り、同年中に安南国王に封じられた（鈴木

(45)　1788年以後の金銀樹の記録をまとめると次の通り。日付は主に『ラタナコーシン朝年代記』に見える受領日。括弧内はその頁数と『大南寔録正編第一紀』の巻数。1788年10月末–11月（p. 113）、1790年12月22日（p. 127. 巻5、庚戌11年11月条）、1791年陰暦5月（巻5、辛亥12年5月条）、1793年12月5日（p. 148.）、1795年11月23日（p. 156. 巻8、乙卯16年10月条）、1798年2月10日（pp. 165–166.）、1801年4月15日（p. 170.）。

また『嘉定城通志』巻3、疆域志、河僊鎮、154–155頁に「戊子四年【黎顕尊景興二十九年、大清乾隆三十三年】初、廣東省潮州府人鄭國華、暹号丕雅新……自稱王、乃援例索貢金花銀花之禮于高蠻國王。匿蟾噂以丕雅新非暹羅世系、拒不用命」とあって、ベトナム側も金銀樹の送付の意味を理解していた。

なおMorragotwong（2011：42）は、ベトナム史料は阮福映の金銀樹の送付を意図的に記録しておらず、そこに阮朝の世界観が表れていることを主張するが、そのようなことはない。

また先行研究は金銀樹について紙幅を割く一方で、『ラタナコーシン朝年代記』が1790年（PRPR1: 127; DC, vol. 1: 169）以降阮福映を「チャオ・アナムコック（เจ้าอนำก๊ก čhao ‘anamkok）」つまり「安南国王」と表記することに注目しない。嘉定を奪還したことで、年代記編者が彼を一国の君主として認めたことの表れかもしれない。ただしこのような呼称の変化はあくまで年代記のなかのことに留まる可能性が高い。『大南寔録正編第一紀』巻2、11葉表、甲辰5年3月条にあるように、すでに1784年に一世王は阮福映に「昭南谷（Chiêu nam cốc）」（チャオ・［ア］ナムコック）と呼びかけているためである。

(46)　『大南寔録正編第一紀』巻4、10葉裏、己酉10年4月条、巻6、37葉裏、癸丑14年12月。PRPR1: 121; DC, vol. 1: 164.

(47)　『大南寔録正編第一紀』巻4、24裏葉–25葉表、己酉10年11月条。PRPR1: 124; DC, vol. 1: 167–168; Rosenberg 1975: 111; Eiland 1989: 48; Morragotwong 2011: 42–43.

1975：437–455；嶋尾2001：290–291）。

この1788年から1802年における一世王政権と阮福映政権の関係について、エーランドとモーラコットウォンの両論文は概して淡白である。ローゼンベルクはもう少し詳しいものの、取り上げられていない出来事も多い（Eiland 1989: 47–50; Morragotwong 2011: 45–46; Rosenberg 1975: 109–113）。しかしのちのラタナコーシン朝・阮朝関係を考えるうえでは、むしろこの時期こそが重要である。双方の史料の突き合わせも依然として必要である。

ここで注目すべきは、富春の阮文恵政権、嘉定の阮福映政権、そしてシャムのあいだで今日のラオスの領域が肝要になっていったことである。それはすでに朱文接や阮黄徳がラオスを経由してバンコクに至ったことにも見えている。

1791年から翌年にかけて阮文恵の軍がウィエンチャンを攻めた。2本ある『ウィエンチャン年代記略述本』の1本には、

> 暦経ること153年亥年（1791/2年）、［中略］。ウィエンチャン、ムアン・ナコーン［パノム］、［その］ソンパミット王がケーオ（ベトナム）に敗れたのもまさにその年であった(48)。

とあり、また別本にも、

> 暦経ること153年亥年、ケーオとの戦いに敗れ、チャオ・ウパラート（副王）を失った。
>
> 暦経ること154年子年（1792/3年）、ケーオ王が外の家族を拉致して地方に下った(49)。

とあって、ウィエンチャンの敗北を記す。『阮氏西山記』および『大南正

(48) *Phongsāwadān yǭ mūang wīangcan*. 1941a: 184. “ศักราชได้ ๑๕๓ ปีใค้ (กุน) ..... เวียงจันทน์เมืองนครเจ้าสมพมิตแตกแกว (ยวน) ก็แม่นปีนั้นแล”

(49) *Phongsāwadān yǭ mūang wīangcan*. 1941b: 191.“ศักราชได้ ๑๕๓ ปีฮวงไค้ แตกเศิกแกว (ยวน) เสียเจ้าอุปราช ศักราชได้ ๑๕๔ ปีเต๋-าไจ้ เจ้าแกว (ยวน) กวาดครัวนอกลงถิ่น”

編列伝初集』巻30、阮文恵伝では、阮文恵は阮光耀にシュエンクワーン（鎮寧）・鄭皐・帰合に攻め込ませた。ウィエンチャン王は城を捨てて逃げ、耀はその象や鉦鼓を得た。阮光耀は長駆してシャム軍を破ったという[50]。『後黎野録』でも阮光耀はウィエンチャンを攻め、ラーオ人が戦いに疲れて逃げたため、ウィエンチャンに入城している[51]。また『南史撮要』はナコーンパノム（楽凡）への侵略も記す[52]。一方で『ラタナコーシン朝年代記』、『大南寔録正編』、『チェンマイ年代記』はこれらと異なり、すべて西山軍が敗北したとする[53]。

このとき阮文恵がウィエンチャンを攻撃した理由は史料によって異なる。『大南寔録』と『後黎野録』はウィエンチャンが朝貢を欠いたためとする。一方『阮氏西山記』と『列伝初集』阮文恵伝では、清に逃げた昭統帝の弟・黎維祗が宣光および保楽または高平に割拠し、土酋を頼りにし、さらにウィエンチャン・シェンクワーン・鄭皐・帰合・シャムの諸蛮と連合し、乂安を落とそうと謀った。そのため阮文恵は軍を派遣し、これを妨害させたという[54]。さらにこれとも異なるのが『ラタナコーシン朝年代記』小暦1154年5月白分9日条（1792年3月31日）の引く阮福映のシャム宛ての書簡である。いわく、内通者の情報として、阮文恵（オン・ローンユアン องลองเยือง ‘Ong Lǫ̣ng Yūang）がビルマに派遣した使者をラーオ国が捕らえてバンコクに送った。そのことを恨んだ阮文恵はラーオ国、クメー

(50)　『阮氏西山記』35葉表裏。「先是黎嗣皇移清。其弟維祗據寶光・保樂地方、依土酋儂福瑨・黄文桐。連結萬象・鎮寧・鄭皐・歸合・暹羅諸蠻、謀破乂安城。惠命乂安督鎮阮光耀爲大總管、都督黎忠爲大司隷、悉發乂安兵拒之。六月克鎮寧擒其渠侶矯侶難。八月滅鄭皐歸合。十月萬象國長棄城走。獲其象鉦鼓。長驅至暹羅界、斬其帥左潘容・右潘超。暹兵敗走。遂還歸、師保保樂。黎維祗與福瑨・黄文桐勢力不敵、俱遇害」。『大南正編列伝初集』巻30、偽西列伝、阮文恵、39葉表–40葉表もほぼ同じ。ただし黎忠の代わりに阮文琬が見える。寶光を宣光に作り、こちらが正しい。また保樂を高平に作る。

(51)　『後黎野録』71葉裏–72葉表。「辛亥【西泰德十四年、光中四年、清乾隆五十六年】……十月惠以哀牢缺貢、命耀爲大總管、黎文忠爲大司隷、悉發乂安兵以征之。十一月耀等進軍攻哀牢、至其城牢人累戰不戰、遂遁。耀引軍入城、收其貨寶象馬而還」。

(52)　『南史撮要』168葉裏。「光平攻破樂凡萬象掠取貨寶而歸。【令打探源頭諸要路可以達暹臘、預爲進攻之計、意欲乘取廣西諸州。煩刑重歛、人皆怨之】」。

(53)　PRPR1: 129; DC, vol. 1: 171.『大南寔録正編第一紀』巻5、22葉表裏、辛亥12年5月条。『大南寔録』のウィエンチャン勝利の記事はシャムからの通知に依拠するものであろう。TCM: 164.『チェンマイ年代記』の英訳であるCMC: 167はルアンパバーンのこととするが、ウィエンチャンの誤り。

(54)　註50、51参照。

ル国さらにバンコクを攻撃するつもりであったという[55]。しかし『大南寔録正編』の当該年条に、これに対応する記事は存在しない。

一方ブリージールによれば、ときのウィエンチャン王ナンタセーンがプアンに侵攻し、その王を拉致したことが発端であるという。プアン王の弟が西山に逃れて阮文恵に訴えたため、ナンタセーンを膺懲するために、このたびの遠征となったという。ナコーンパノム軍は西山に敗北した。ナンタセーンは要求を受け入れてプアン王を解放した。ブリージールは、野心家のナンタセーンはさらにシャムの支配から脱するため、かえって西山朝と結び、1792年後半には西山にシャム侵攻を要請したと主張する[56]。

いずれにしても、1791年に西山による侵攻があった。西山軍がウィエンチャンを落としたとしても、長期間占領するには至らずに撤退したのであろう。ナンタセーンはそれをバンコクに我が軍勝利と報告したものと思われる。小暦1153年5月白分15日（1791年4月18日）にシャム宮廷は阮福映に書簡を送ってこれを通知した（PRPR1: 129–130; DC, vol. 1: 171–172）。『大南寔録』によれば、このときシャムはウィエンチャンから送られてきた西山人の捕虜をも映に引き渡している[57]。『ウィエンチャン年代

(55) PRPR1: 137; DC, vol. 1: 183–184. 西山朝とビルマの関係については別に論じる予定である。

(56) Breazeale 2002. ナンタセーンによるプアン王捕縛については、1795年の阮光纘から一世王への国書（NL. CMH. R. I. C.S. 1158, no. 3）にも見える。

(57) 『大南寔録正編第一紀』巻5、22葉表–23葉表、辛亥12年5月条。なお並行して1790年から翌年に、チャオプラヤー・アパイプーベートをめぐってシャム宮廷と阮福映政権のあいだで緊張が生じている。『大南寔録正編第一紀』巻5、9葉表裏、庚戌11年11月条によれば、阮福映が人を派遣してバサックを統治していることをアパイプーベートが恨み、一世王に阮福映がシャムに攻め込もうとしていると讒言した。一世王はこれに騙されて兵を送ったが、阮福映が阮文閑をシャムに遣わしたところ、一世王は兵を退かせた。一方年代記では、1790年12月22日に阮福映はシャムに書簡を送って、シャムの勅使2名がベトナム人女性を拉致したこと、それを譴責する文書を持ってきたシャム官僚も賭博と女遊びに耽っていることを訴えるとともに、アパイプーベートが軍船を建造し、阮福映を攻撃する構えを見せたことを通知した。1791年4月18日にシャム宮廷は阮福映に書簡を送り、ウィエンチャンのことともに、アパイプーベートから映を非難する上申書が届いたが、一世王は映を是とすること、ただし阮福映政権がまだ堅固でないためアパイプーベートにカンボジアを統治させており、首都造営が終われば、アン・エーンに当地を任せることを伝えた（PRPR1: 127–130; DC, vol. 1: 170–173）。このとき一世王は米を嘉定に輸出することを承諾している。これのみ対応する記事が『大南寔録正編第一紀』巻5、23葉表、辛亥12年5月条に見える。同巻5、32葉裏、同年12月条によれば、阮福映は再び阮文閑と劉福祥をシャムに遣使して、アパイプーベートが阮福映を恨み、辺境を騒擾することを問題にしている。アン・エーンが王としてカンボジアに帰国し、アパイプーベートがバッタンバンに去るのは1794年のこ

記略述本』と『ラタナコーシン朝年代記』から、1792年にもう一度西山軍の侵入があったようである。

Ⅵ　ラオス作戦の提案

このウィエンチャンへの侵攻をきっかけに、一世王・阮福映両政権のあいだで、一方で帰仁を攻め、また一方でベトナム史料に言う上道、つまり今日のラオスを経由してベトナム北部へと侵攻するという作戦が持ち上がった。ただしこの作戦を提案したのが年代記では阮福映側、『大南寔録』では一世王側になっている。以下、本文中で何度か言及する史料引用には番号を振る。

『大南寔録正編第一紀』巻6、2葉裏、壬子13年閏2月条（1792年3月23日–4月20日）に、

【史料1】
閏二月、保護[58]・阮文閑、該奇[59]・阮進諒がシャムより還った。

とある。遣使の目的は記されていない。ただし前年の陰暦12月に、アパイプーベートについてクレームを入れるために阮文閑と該奇・劉福祥がシャムに派遣されている[60]。阮進諒は劉福祥の誤りかもしれない。

一方、この記事に対応する可能性のある『ラタナコーシン朝年代記』小暦1154年5月白分9日条（1792年3月31日）の引く阮福映の書簡は、上述のごとく阮文恵がビルマに送った使者をラーオ国が捕らえてバンコクに送ったため、

【史料2】
阮文恵は復讐心にかられて、［軍を］進めてラーオ国を討とうとした。

とである（PRPR1: 152–153; DC, vol. 1: 206–207.『大南寔録正編第一紀』巻7、12葉表裏、甲寅15年9月条）。

(58)　管後水営保護のこと。

(59)　武官の官名のひとつ。

(60)　註57参照。

［軍を］進めさせてクメール国を討つだろう。そして陸軍・海軍をバンコクへと進めるだろう。もしバンコクが軍を進めて阮文恵めを討つのであれば、北進してタンキア（トンキン＝昇龍）国を討っていただきたい。私は陸軍・海軍を進めて帰仁市・フエ（富春）市を討とう。もし［軍を］発して攻撃するのであれば、いつであっても、印章［を捺した文書］を発給してお知らせいただきたい。私も同時に［軍を］発しよう(61)。

とあり、阮福映のほうから挟撃作戦を提案している。

年代記は続けて9月黒分10日（8月13日）の大蔵大臣の返信（後述）に移る。一方、『大南寔録正編第一紀』巻6、2葉裏、壬子13年3月条（4月21日−5月20日）に、

【史料3】

三月、シャムが書を寄越し、軍が上道より西山の賊を討つのを助けることを請うた。これに先立って、西山の賊がウィエンチャンと恨みを構え、再び兵を率いて攻めた。ウィエンチャンは大敗した。シャム王はウィエンチャンのために報復しようとし、我らに軍の派遣を請うた。かつ龍川・堅江を鄭公柄に与え、バサックをカンボジアに与えるように請うた(62)。

とあって、シャム側からウィエンチャンのために西山に報復すべく援軍を要請している。この記事は年代記にない。阮福映は次のように返信した。

【史料4】

帝は命じてこれに返書させて言うには、「私は嘉定を征服して以来、

(61) PRPR1: 137. “องลองเยืองผูกพยาบาทคิดจะยกไปตีเมืองลาวได้แล้ว จะให้ยกไปตีเมืองเขมร แล้วจะยกกองทับบกเรือเข้าไปณกรุงเทพมหานคร ถ้ากรุงเทพจะยกกองทับไปตีอ้ายลองเยือง ขอให้ยกไปทางเหนือเข้าตีเมืองตังเกี๋ย ข้าพเจ้าจะยกกองทับบกเรือไปตีเมืองกุยเยินเมืองเว้ ถ้าจะยกไปตีเมื่อใดขอให้มีตราออกไปให้แจ้ง ข้าพเจ้าจะได้ยกไปด้วยให้พร้อมกัน” DC, vol. 1: 183−184.

(62) 「三月暹羅來書、請助兵從上道討西賊。先是西賊與萬象構怨、復引兵來攻。萬象大潰敗。暹王欲爲萬象報復、乞師于我。且請以龍川・堅江賜鄭公柄、巴忒賜眞臘」。

一隅を転々として食べてもうまくなく、寝ても枕に安んぜず、深く国の仇をいまだ討っていないことを思っている。今聞くところでは、賊の阮文恵は北河の兵を選んで軍2、30万人を得て、謀って海軍・陸軍を大挙して侵攻しようとしている。まず上道の諸蛮を攻め、さらに進んでプノンペン（南栄）を破り、反転してサイゴンを攻めるだろう。背後では海軍が崑崙島に入り、河僊を破り、龍川・堅江からサイゴンの前面を攻めるだろう。もし彼が勝利を得れば、次にシャムに迫るだろう。これはただに私の敵であるだけでなく、シャムの敵でもある。今の計画のために私が海軍・陸軍をもって帰仁を攻め、王が精兵をもって乂安を攻め、賊が乂安を守れば、王はその前面を攻め、私はその背後を［攻める］ふりをする。賊が富春を守れば、王はその背後を［攻める］ふりをして、私がその前面を攻めよう。前後から挟撃すれば、賊に退路はなくなろう。

阮文恵がラオスとプノンペンを攻める可能性を指摘しつつ、阮福映が帰仁を攻める一方で、一世王が乂安を攻める作戦を提案している。返信はこれに続けて、龍川と堅江は敵が狙っており、防衛の地になるだろうし、鄭公柄はまだ幼く指揮が取れないので、他の官僚にこの地を守らせている、バサックをカンボジアに与えないのは、阮福映と敵対しているアパイプーベートのせいで、シャムが別人を派遣するならば、映はこれら細事にこだわらない、とある(63)。

この記事も年代記には見られない。また【史料3】で一世王は援軍を要請しているが、【史料4】で乂安を攻めるのは一世王のみを予定している。

(63)『大南寔録正編第一紀』巻6、3葉表裏、壬子13年3月条。「帝命爲書復之曰「寡人自克復嘉定以來、輾轉一隅、食不甘味、臥不安枕、深以國讎未復爲念。今聞、賊阮文惠揀北河兵、得衆二三十萬、謀將大擧水歩入冦。歩兵先攻上道諸蠻、進破南榮、轉攻柴棍。背後水兵入崑崙、破河僊、從龍川・堅江、以攻柴棍前面。若其得勝、次及於暹。此不特寡人之仇、亦暹之仇也。爲今之計、寡人以水歩兵攻歸仁、王以重兵攻乂安。賊守乂安、則王攻前面、而寡人擬其後。賊守富春、則王撓其後、而寡人攻其前。首尾夾兵、賊無去路矣。至如龍川・堅江、兵亂之後、民物逃散。賊兵南窺、此必爲受兵之地。鄭公柄幼不能軍。是以命官守之、非愛也。巴忒之不與臘者、以昭錘卞之故。若得暹別人來、寡人何惜此等細事。王不必關心、亦不必往復繁言爲也」」。アパイプーベートについては註24、57も参照。

この返信は『隣好例』2葉裏、壬子年3月条にも見えるので(64)、返信の時期は陰暦3月で間違いなかろう。

仮に『大南寔録』と年代記、ともに欠落があり、かつ両文献の日付が正しいとすれば、次のように双方の史料を組み合わせられようか。【史料1】【史料2】1792年3月末に阮福映が遣使して挟撃作戦を一世王に提案した。【史料3】一世王は返信を送り、ウィエンチャンのために西山を攻撃するために援軍を請う。【史料4】4–5月（陰暦3月）に阮福映は返信を送り、再度挟撃を提案した。

しかし【史料2】と【史料4】は特に下線部において酷似しており、【史料2】の日付が間違っている可能性がある。その場合、『大南寔録』の通り、【史料3】シャムが書簡を送り、ウィエンチャンのために西山を攻撃すべく援軍を要請、【史料4】=【史料2】阮福映は返信を送り、挟撃作戦を提案、という時系列になる。『ラタナコーシン朝年代記』の一世王期部分は日付に問題があることがままあるので、こちらのほうが無難かもしれない。

いずれにしても、結局この作戦は実施されなかった。ビルマ軍がダウェー（所謂タヴォイ。タイ語ではタワーイ）に侵攻したためである。1792年3月3日にダウェー知事のネーミョーチョーティン（『ラタナコーシン朝年代記』ではミンザイン領主（ザー）の訛音メーンチャーンチャー）がシャムに寝返ったことが判明すると、ビルマ王ボードーパヤーは王太子マハーウパヤーザーを総司令官に任じて軍を派遣した。ビルマ軍は6月にヤンゴンに入った。シャムの大蔵大臣は9月黒分11日（8月13日）に阮福映に書簡を送り、ウィエンチャンが西山軍を破ったこと、挟撃作戦は了解した、阮福映が帰仁を攻める際には東方諸地方の軍を動員して支援しよう、しかし今はまずビルマとの戦いが先決である、と通知した。同年末にシャム軍は敗北し、

(64)『隣好例』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 63）、全39葉、毎半葉8行、毎行22–24字。1葉表に「嘉隆元年至明命元年暹羅使事草本」、1葉裏に序文として「奏爲奉照自國初以來、如暹修好、竝暹國遣使、詣京、具有國書・公文・品物、往復某事。一一恭摺進呈御覽。謹奏。計開」とある。嘉隆元年からとあるが、実際には壬子年（1792年）3月から明命元年（1820年）7月までにおける、ベトナムとシャムとのあいだで交わされた使節・国書・公文（大蔵大臣と吏部・礼部とのあいだの書簡）・贈り物について編年体で纏めた書物である。『大南寔録』にはない記事を含む。2葉表、「壬子年三月日、遣使如暹。先是該奇諒自暹遞國書回十六天、内叙該國王進追龍驤事。至是復遣該奇諒、遞本國書如暹、歴叙探得龍驤兵機情形、及約暹國王擧兵、從上道出擊北城、兼叙差守河巴仙忒二府事」。

ダウェーは再びビルマの手に戻った[65]。

これ以後、シャムから阮福映への援軍派遣は、ビルマとの状況に左右されるようになる。その一方で、ラオスを経由した人の往来も続いた。

1792年9月16日に阮文恵が死去し、阮光纘（景盛帝）が継ぐと、北部では旧黎朝の顕宗の子・黎維禍を盟主に推戴した反乱が起こった。黎維禍は阮福映と呼応すべく、振（姓は不明）など7人を上道からシャムに派遣した。シャム人は彼らを嘉定に送ったが、7人は途中で海賊に捕らえられて売却されてしまった。阮福映が彼らを購入し、1793年陰暦3月に阮進諒を遣わしてシャムに送り、上道経由で帰郷させた。年代記の1155年6月黒分12日条（1793年5月6日）に見える、ユアン人7人がラーオ国を行くために、通行証の発給を阮福映が一世王に求めた記事がこの出来事に対応する[66]。『大南寔録』に照らして初めてこの7人の正体が判明するのである。

また『大南寔録』によれば、同年陰暦9月（10–11月）、阮福映支援のため、シャムの副王とプラヤー・チャクリー（丕雅質知）が陸軍5万人を率いてプノンペンに、また軍船500艘が河僊に到着した。北風の時期が近づいていたため、結局西山と戦うことなく、シャム軍は帰ったという。ローゼンベルクは1792年から93年にシャムはダウェーでビルマと戦っていたのだから、この援軍はありえないと指摘する[67]。

しかし『コンバウン朝大御年代記』では、シャム軍を退けたのち、マハーウパヤーザーはダウェーに守備兵3000人を残して、ビルマ暦1154年ピャードー月黒分8日（1793年1月4日）に帰京の途についた。敗戦後のことゆえ、可能性はきわめて低いものの、時期的には陰暦9月にシャムが阮福映に援軍を送ったとしても、ありえなくはない。ただしこのダウェーの戦いにシャムが投入した総兵力は4万人（『ラタナコーシン朝年代記』）または5万人（『コンバウン朝大御年代記』）とされる（PRPR1: 143; DC, vol. 1: 192; KBZ,

(65) KBZ, vol. 2: 66–73; PRPR1: 134–143; DC, vol. 1: 179–199. なお『ラタナコーシン朝年代記』のダウェーの戦いの記事は小暦1155年条（1793/4年）まで続くが、誤り。

(66) 『大南寔録正編第一紀』巻6、16葉表、癸丑14年3月条。PRPR1: 143; DC, vol. 1: 199. 年代記では、阮福映は軍がラーオ国を進めるように、また食糧を円滑に購入できるようにするためにも通行証を求めているが、本文で後述するように、これは1799年の通行証要請と混同されている可能性がある。

(67) 『大南寔録正編第一紀』巻6、28葉表裏、癸丑14年9月条。Rosenberg 1975: 112, fn. 98.

vol. 2: 68, 73)。したがって陸軍5万人、軍船500艘の援軍というのは現実的ではない。

Ⅶ　ラオス作戦の再提案

1793年に阮光纘は阮福映に攻撃されていた阮文岳支配下の帰仁を吸収し、以後阮福映政権と激しく争うことになる（嶋尾2001：291）。翌1794年に阮光纘（タイ語ではオン・カンティンองกันถิน ‘Ong Kan Thin. 景盛 Cảnh Thịnhの訛であろう）は一世王に国書を陸路で送り、阮福映を捕えるように要請した。一世王は返信を送り、中立の姿勢を示した。この返信の控えが現存しているが、日付がない。年代記は3月7日のこととする。翌1795年1月に阮福映の使者が来暹した際に、シャム宮廷はこの使者のことを通知した(68)。

『大南寔録』によれば、陰暦12月（1795年1月21日–2月18日）に阮文閑と阮文仁がシャムに派遣されており、年代記と時期が一致する。シャム宮廷は、西山の使者を無事帰して富春政権が油断しているところを、日を決めてシャムが上道から富春の背後を、阮福映が海軍を率いてその前面を攻めるという作戦を提案した。使者が帰ると、阮福映は再度阮文閑らを遣使し、期日を取り決めたが、シャムにビルマに関する危急のことがあり、果たせずに閑らは帰国した(69)。

挟撃作戦が再度提案されたが、今回もビルマ情勢がネックになって実行されなかった。ただしビルマに関する危急のこととは具体的に何なのか記されていないし、『大南寔録』の書き方ではその時期もはっきりしない。

一方年代記所収、阮光纘の使者について阮福映に伝える上述の書簡（日

(68)　NL. CMH. R. I. C.S. 1156, no. 2. この国書についてはEiland（1989: 49–50）、Morragotwong（2011: 74–75）も参照。PRPR1: 150–151, 153–154; DC, vol. 1: 202–205.

(69)　『大南寔録正編第一紀』巻7、21葉裏–22葉表、甲寅15年12月条。「遣管後水營保護阮文閑、中軍右支校尉阮文仁、充正副使如暹【賜二王輭輿二十具】。先是西賊阮光纘使、使以金銀厚禮、求通于暹。欲爲遠交近攻之策。暹人知其意。適有我使來、具告以事。且云「今若拘其使、我殺之、賊亦不盡。不如將計就計、使賊信之。富春必不爲備。因與我約日擧兵。暹從上道攻其後、我由水道攻其前。富春既得歸仁、不攻自破矣」。我使還以告。帝乃遣閑等往、約以發兵日期。會暹有緬甸之警事、不果閑等遂還」。「賜二王輭輿二十具」「今若拘其使、我殺之、賊亦不盡」はPRPR1: 153–154に一致する文がある。

付は不明）に、

> アワ（アヴァ）王もナップタチェースーに書簡を持たせて来た。［書簡には］真の友好を結ぶことを請う、とあったが、いまだアワ王の本心がわからない。返書して使節を帰らせなければならない。（中略）安南国王が再度帰仁市を攻撃しに進発することについては、国王陛下もすこぶる喜んでおられる[70]。

とあるのが対応する記事であろう。どうも年代記は2回の通信を1回にまとめているようである。記録が縮約された結果、挟撃作戦を提案する記事が省略され、「シャム軍は参加できなくなったが」に類する文言も削られ、下線部のみが残ったのではあるまいか。

ナップタチェースーなるものは詳らかでないが、確かにダウェーの戦いののち、1793年から主にモッタマ（マルタバン）知事とカーンチャナブリー国主のあいだで書簡のやりとりが続けられていた[71]。モッタマ知事はビルマ宮廷が派遣したミョウウンである。一方カーンチャナブリー国主は土着の有力者なのかシャム宮廷が派遣した官僚なのか判然としないが、彼を名義とした書簡の控えには、ときに宮廷政府の官僚が起草・決裁した旨が記されたものがある。1795年1月5日、モッタマ知事からカーンチャナブリー国主に宛てて、両国君主間の講和の要請を仄めかす書簡が届いた。両者のあいだでさらに書簡の往還がされたのち、4月14日にシャム宮廷は宰相名義でモッタマ知事に書簡を送り、和平を望むならば、ビルマ王の国書を携えた使節を送るように、と伝えた[72]。一方ビルマ語史料では、5月13日付けの詔勅で、モッタマ知事がヨーダヤー（シャム）からの使者が至る予定を報告したのを受けて、ボードーパヤー王は使者の到着時に再度報告する

---

(70) PRPR1: 154. “เจ้าอังวะก็แต่งให้นับตะเจสูถือหนังสือมาว่า
ขอเปนทางไมตรีเทจจริงก็ยังไม่เหนใจเจ้าอังวะจำเปนจำตอบหนังสือให้ราชทูตกลับไป .....
ซึ่งเจ้าอนำก๊กจะยกขึ้นไปตีเมืองกุยเยินอีกนั้น สมเดจพระเจ้าอยู่หัวมีความยินดีด้วยเปนอันมาก” DC, vol. 1に対応する記事なし。

(71) NL. CMH. R.I. C.S. 1155, no. 1, 1/kǭ, 1/khō khwāi, 4, 6; C.S. 1156, no. 6, 10; C.S. 1159, no. 2/kǭ.

(72) NL. CMH. R.I. C.S. 1156, no. 3, 6; C.S. 1157, no. 4, 5. 小泉（2008: 83–84）も参照。

ように命じている（Than Tun (ed.) 1986: 503）。このときの書簡を持った使者のことであろう。地方官レベルではなく、事実上中央政府間の折衝であったことがわかる。『大南寔録』の言うビルマに関する危急のこととは、この一連のやりとりのことと考えられる。

Ⅷ　シャムへの援軍とラオス作戦の実行

ラオス経由でベトナム北部を襲う試みはその後も続いた。

1797年陰暦8月、阮福映は陳福質をシャムに派遣し、ビルマがイギリス人に海軍を借りてシャムを攻めると聞いたので、実際にそうなったら、阮福映が海軍を援軍として派遣する、と伝えた。シャム宮廷は感謝して硝石10万斤を贈るとともに、書簡を送り、能吏を選んでシャム軍と合流させ、上道からウィエンチャン経由で乂安を奪取し、それによってベトナム北部からの援軍を断ち、また富春の背後を攻めることを提案した。軍需物資は現地の人々が供給するので心配には及ばないという。阮福映は以前にウィエンチャンを通って軍を進めようと考えて、アパイプーベートにウィエンチャンへのルートを尋ねたこともあったため、書簡を得て大いに喜んだ(73)。

年代記でも、シャム宮廷はビルマと組んだイギリス海軍がチャオプラヤー河口を攻めるという情報をビルマ人捕虜などから得ている。しかしそのような事態は起きなかった。どうもこれはシャム側の注意を逸らすため、またはシャム軍を分散させるためにビルマ側が流したデマであったらしい。翌1798年1月にネーミョーチョーティンティーハトゥー率いるビルマ軍がチェンマイを奪還すべく、北タイに侵入した。一世王は副王を出陣させてチェンマイ王カーウィラを支援するとともに、河口を守るため、阮福映に援軍を要請した。映は3月21日に軍船108艘、兵7720人を派遣した

(73)　『大南寔録正編第一紀』巻9、29葉裏–30葉表、丁巳18年8月条。「遣欽差該奇陳福質奉國書如暹、以兵事報。且言「聞緬甸借紅毛水兵攻暹。兵果發、則我出水師爲之截擊」。暹人復書感謝、獻硝硝十萬斤。書言「我兵他日進討西賊。兵用有缺、願爲之助。又請遴幹員會暹歩兵、從上道直抵萬象、襲取乂安。一以斷北河援兵、一以攻順化背後。所至軍需、自有蠻獠供億、不足慮也」。帝初欲通萬象、嘗遣人往北尋奔、訪昭錘卞、以上道去向遠近。至是得書大悦」。

（PRPR1: 162–163; DC, vol. 1: 221–222; KBZ, vol. 2: 98–100）。

『大南寔録正編第一紀』巻10、1葉裏、戊午19年2月条（3月17日–4月16日）にも、シャムがビルマに攻められ、援軍を要請したため、阮福映は阮黄徳と阮文張に7000余人と軍船100余艘を率いさせて救援に向かわせたとあり、年代記とよく一致する。しかし崑崙島に至ったところで、シャムから捷報が来たため、阮福映は阮黄徳と阮文閑に船数艘とともにシャムに行かせ、残りの軍は撤退させた。実際『コンバウン朝大御年代記』によれば、タグー月白分15日（3月31日）にチェンマイにおいてビルマ軍はカーウィラ・副王連合軍に撃破されているので[74]、時期も合っている。

ここから、実際に干戈を交えることはなかったものの、シャム宮廷は阮福映に対ビルマ戦への援軍を期待していたことがわかる。

さて、1798年に阮文岳の子・阮文宝が帰仁を奪い、嘉定に降伏の使者を送るという事件が起こった。阮光纘はすぐに帰仁を包囲して宝を捕らえて殺した。纘は讒言を信じるようになり、官僚たちを処刑した。臣下の心は彼から離れていった[75]。

『大南寔録』によれば、かかる状況を好機と捉えた阮福映は翌1799年陰暦2月、阮文瑞と劉福祥に国書を持たせてシャムに派遣し、共同作戦を申し出た。もしシャムの大将がクメールとウィエンチャンの兵を徴用し、上道より乂安に下り、阮福映の気勢を助ければ、西山は腹背に攻撃を受け、謀略を立てる暇はなくなろう。映は勝利に乗じて一挙に旧領を回復するのだという。一世王は承諾し、上道の諸民族に文書を送り、兵や象を整えさせて待機させた[76]。

同年陰暦4月、阮文瑞は欽差上道将軍に任命され、まずシャムに赴いた。

---

(74) KBZ, vol. 2: 100–101. 一方、PRPR1: 163; DC, vol. 1: 222は、イギリス軍が来ないことが判明し、またベトナム軍を国内に入れるのは不安であるため、シャム宮廷は進軍を止めさせたとする。

(75) 『大南寔録正編第一紀』巻10、16葉表–17葉表、戊午19年11月条。

(76) 『大南寔録正編第一紀』巻10、22葉裏–23葉表、己未20年2月条。「遣副右水營欽差統兵該奇阮文瑞・欽差該隊劉福祥充正副使奉國書如暹。【贈佛王輔國大號船一艘、随船鋼礮十輛。】書言「今西賊骨肉相戕。又疑殺其舊臣宿将。此乃天燹其亡。我國已整修兵甲、指日進攻、最是好機會。若得暹大將調眞臘・萬象兵、從上道下乂安、助我聲勢、則彼腹背受敵、不暇爲謀。我可以乘勝長驅収復舊疆、在此一擧矣」。暹王許諾。先傳檄于上道諸蠻、令預整兵象以待」。

一世王はまさに部将を派遣しようとしていたが、またしてもビルマとの戦いが起こった。それが具体的に何であったのかは後で検討する。シャム軍の派遣は三度中止されたのである。王は硝石5万斤とともに、映の配下が現地で物資や通行の面で便宜を図られるように通行証（関文）を瑞に渡した。瑞が帰国すると、阮福映は、彼にウィエンチャンに至ったら、「シャム軍が我が軍とともに上道から乂安を取るであろう」と喧伝して西山を驚き疑わせ、帰仁の援軍に加われないようにすれば、帰仁は孤立するので、旦夕のうちにこれを破れるであろう、と指示した。阮文瑞らは国書・官物とともに150人を率いて、クメール人の屋牙逋易瀝を案内人として、尋芃楣津、区慷、幽奔を経由してウィエンチャンへと進んだ。尋芃楣津（尋芃と楣津かもしれない）はカンボジアの地名、区慷はウィエンチャンの地名というが不詳。幽奔はウボンラーチャターニーであろう。現地の首長はみな命令に従ったという(77)。

同時に阮福映は海軍を率いて帰仁を攻め、陰暦6月（7月3日–31日）にこれを落とした。映はシャムに遣使して勝利を伝えた(78)。

一方、瑞らはウィエンチャンに到着した。陰暦8月のことである。ナンタセーン王は1794年に一世王によって廃位され、代わってバンコクで人質生活を送っていたインタウォン（昭印）がウィエンチャン王に就任していた。彼は同じくバンコクに亡命していた阮福映と面識があり、嘉定に遣使を試みたこともあった。インタウォン王は喜んで阮文瑞を迎え、映の国書を受け取った。王は瑞に、清華と乂安の西山軍は順化（富春）に集まっているので、虚に乗じてこれらを落とすのは難しくなかろう、と攻撃に同意したが、南風の季節の終わりにあたり、海軍を擁する阮福映軍の進退が

(77)『大南寔録正編第一紀』巻10、34葉裏–35葉表、己未20年4月条。「授該奇阮文瑞爲欽差上道將軍、該隊劉福祥爲欽差典軍、協與參謀阮懷珠・參軍黎文春率所屬一百五十人、奉國書官物【各色縐紗、錦緞】、從上道招諭萬象。瑞等初抵暹。暹王將遣將與俱、適有事於緬甸。乃獻硝硝五萬斤、助兵用。又給以通行上道關文、曰「此關文最得力。我派人執此以往、所過必供億護送、無礙也」。瑞等還詣行在、具以事聞。帝卽遣之諭曰「兵不厭詐。正可因機就事。汝等至萬象、宜聲言、暹兵與我兵由上道取乂安、使賊驚疑、不敢盡括北河入援、則歸仁孤城、旦夕可破此。乃漢高留項數月、以取萬全之策也」。乃賜之冠服各一副、錢四百緡、番銀一千元。瑞等辭行、以眞臘屋牙逋易瀝爲向導、自尋芃楣津【眞臘地頭】、區慷至幽奔【萬象地頭】。蠻酋皆應命如響。區慷蠻尋遣使坤添曼孫來貢【雄象二匹、犀角六座】」。

(78)『大南寔録正編第一紀』巻10、35葉裏–41葉表、己未20年5–6月条、巻11、1葉表裏、同7月条。

どうなるのかわからず、仮に清華や乂安を得ても、守りきれるとは限らない、と指摘し、来年を待って阮福映が順化を攻めるときに、ウィエンチャン軍が乂安を襲うことを提案した。瑞は同意し、黎文春に嘉定に報告させた(79)。

さて、『ラタナコーシン朝年代記』においてこの一連の出来事に対応すると思われる記事は、小暦1161年3月黒分7日条（1800年2月17日）に見える。時期を誤っているうえに、その内容も『大南寔録』と噛み合わない。

> ［小暦1161年］3月黒分7日に至ると、安南国王が国書をもって、(1) プリアム（？）銃（砲？）をさらに10丁献上するとともに、鋳鉄を購入して銃弾を鋳造することを願った。ラーオ軍とクメール軍を進発させ、ラーオがムアン・ラーナムヌアンと呼ぶ乂安市を攻撃し、カイスーン（西山）の者どもを悩ませることを要請した。安南国王は戦いがしやすくなるであろう。国王陛下は代わりに (2) 火薬500ハープを下賜して応えた。鋳鉄については、［王は］オン・トゥンサーイスーンに望みのままに購入させた。しかし (3) クメール軍とラーオ軍については、返答を出して言うには、「この乾期に動員させれば、人員がすべて揃ったときには雨期に入ってしまい、乂安に進んでも、道は遠く難路であり、兵は多くが病気になるだろう。クメール軍のみに助けさせよう」と。先に安南国王は帰仁を攻撃していた。(4) 国王陛下は命令書をソムデット・ファー・タラハ・ポック（カンボジア王の側近）へ送らせ、軍を準備させて帰仁を攻撃する安南国王を助けさせた(80)。

(79) 『大南寔録正編第一紀』巻11、7葉裏–8葉裏、己未20年8月条。「上道將軍阮文瑞・典軍劉福祥等至圓禛城【卽萬象國都】。初帝駐蹕望閣、萬象國王昭印朝于暹。因往謁見、心甚敬慕之。旣還國、聞帝克復嘉定。嘗欲遣使納款、路梗遂不果。至是得報、大喜親率其國僚屬、拜迎國書、延款官兵甚厚。謂瑞等曰「西賊萬象之仇敵也。曩聞清乂之兵賊已悉集于順化。今乘虛掩取、想亦無難。但南風晩候、未知天兵進退如何。縱得之、未必可守。莫若使一人回軺密陳兵事、待來年刻期、王師攻順化、印請悉敝邑之賦直下乂安、決一戰、殲西賊、俘其黨爲奴、以雪前人之恥。是印之至願也」。瑞等乃委參軍黎文春還、復令參謀阮懷珠・該隊阮文蘊等往諭鎭寧及清乂諸蠻、冊所至無不聽命」。

(80) PRPR1: 167–168. “ครั้นมาถึงณเดือนสามแรมเจดค่ำ เจ้าอนำก๊กมีพระราชสาส์น ถวายปื้นเปรียมเข้ามาอีกสิบบอก ขอจัดซื้อเหลกหล่อออกไปหล่อกระสุนปื้น ขอกองทับลาวทับเขมรออกไปตีเมืองแง่อานลาวเรียกว่าเมืองล่าน้ำหน่วงไว้ให้พวกไกเซินพว้าพวังหลัง เจ้าอนำก๊กจะได้ทำศึกโดยสดวก

下線部（2）の火薬500ハープは『大南寔録』己未20年4月条の「硝硝五萬斤」と一致する。一方で下線部（1）は陰暦2月に阮福映が贈った「随船鋼礮十輛」かもしれない。

『大南寔録』では、一世王はこの作戦に協力的であったのに対して、年代記の一世王は、ラーオ軍の参加要請を退けている（下線部（3））。その理由もビルマ云々ではない。ただし時期が悪いというのは、『大南寔録』に見えるインタウォンの言葉に似ている。阮福映またはインタウォンからの報告が、一世王の言葉に変えられてしまったのだろうか。

シャム側の部将の派遣も依頼されていない。通行証も発給されていない。ただし、前述したように、年代記の小暦1155年6月黒分12日条（1793年5月6日）に、阮福映は黎維禩の配下7名を昇龍に帰すために、そして「安南国王が軍を進めて帰仁市を討つので、ラーオ国の道を進む軍が食料を欠いても、つつがなく購入・入手できるように印章［を捺した文書］を求めた」ため、一世王は通行証を発給させている。本来1799年にあるべき記事が1793年に入れ込まれているのかもしれない[(81)]。

下線部（4）も、帰仁攻撃のためというのが事実であれば、時期がおかしい。カンボジアの年代記の1721年条（1799/1800年）に対応する記事があるが、日付がなく、jettha月（1799年6月3日–7月2日）からphalguna月（1800年2月24日–3月25日）のどこかにあたる（坂本訳、上田編2006：132）。帰仁が陥落する陰暦6月（7月3日–31日）以前のことであろう。

以上から推測するに、この記事は、時期の異なる複数の記録を切り貼りして作られたように思われる。その作業が年代記の編纂時に行われたのか、年代記の源泉資料がすでにそうなっていたのかは分からないが、信頼できる記事ではない。また、この記事から阮朝の成立まで、ベトナム関係について年代記にはかなりの不備があるように思われる。

พระบาทสมเดจ์พระเจ้าอยู่หัว ได้พระราชทานดินประสิวตอบแทน
ไปห้าร้อยหาบ เหลกหล่อนั้นก็โปรดให้องทุงทรายเซินจัดซื้อตามปราฐนา
แต่กองทับเขมรกองทับลาวนั้นมีตอบออกไปว่าจะให้ออกไปกะเกณฑ์ในแล้งนี้
กว่าผู้คนจะพรักพร้อมกอเข้ารดูฝนเสียแล้ว จะยกไปเมืองแง่อานก็เปนทางใกลกันดาร
ไพร่พลจะป่วยเจบมาก จะให้แต่เขมรไปช่วย เจ้าอนำก๊กดีเมืองกุยเยินก่อน แล้วสมเดจ์พระเจ้าอยู่หัวโปรดเกล้าโปรดหม่อมให้มีตราไปถึงสมเดจ์ฟ้าทละหะปกให้จัดทับไปช่วยเจ้าอนำก๊กดีเมืองกุยเยิน”
DC, vol. 1: 226–227.

（81） 註66参照。

一方、一世王が上道から西山を攻めるのに協力することを申し出るのみならず、シャムの部将が阮文瑞に同行したとするのが『南史緝編』である。その記事は『大南寔録』とおおむね同じであるが、道案内を務めたのがクメール人の屋牙逋易瀝ではなく、「暹将・昭丕雅肥森」である点が異なる(82)。しかしこれと一致する史料が他にない以上、これを事実と見なすには躊躇せざるをえない。思うに、陰暦2月に一世王が共同作戦に同意したとき、この「暹将・昭丕雅肥森」を案内人として派遣するのを約束したのではあるまいか。しかし結局シャム軍の参加は中止されたため、屋牙逋易瀝が代わりに案内人となったのはなかろうか。

それでは『大南寔録』の言う、シャム宮廷に作戦参加を中止せしめたビルマとの戦いとは何か。『ラタナコーシン朝年代記』小暦1160年条によれば、1799年1月30日にチェンマイ王カーウィラから、ビルマ軍がチェンマイ方面に侵攻する気配ありとの連絡がバンコクに入った。ルアンパバーンからも同様の報告があった。3月5日にはチェンマイから、ビルマ王は軍を4方面から進めさせたとの報告が入ったが、シャム暦4月（3–4月）になってもビルマ軍は侵入して来なかった。情勢に不安を覚えた一世王はウィエンチャン軍をラヘーン（ターク）に駐留させたが、結局ビルマ軍は来寇しないまま、雨期になると撤退したという（PRPR1: 166–167; DC, vol. 1: 223–225）。

『コンバウン朝大御年代記』と『チェンマイ年代記』はこの出来事に言及しない。しかし『ウィエンチャン年代記略述本』の1本には、『ラタナコーシン朝年代記』と同様に、1798/9年にウィエンチャン軍がラヘーンに赴いたが、ビルマと戦うことなく帰ったことが記されている（*Phongsāwadān yǭ mīrang wīangcan.* 1941b: 191）。1799年1月から、特に3月から5月にかけて、シャム宮廷はビルマ軍来襲に注視せねばならなかったことは事実と考えられる。そのため阮文瑞にシャム軍を同行させるのは中止されたのだろう。

(82) 『南史緝編』巻6、70葉表裏。「己未【阮光纘景盛七年、大清嘉慶四年】夏四月、命統戎阮文瑞・副將劉福祥率樂從軍、暹將昭丕雅肥森爲向道【由前年暹王請助兵從上道攻西山】。從山路招諭萬象及上道諸蠻使各動兵、以分賊勢。瑞既至、宣諭旨。萬象王奉命、遂遣使通欵、以雄象獻。瑞復令所屬該隊阮文蘊等諭鎭寧及清乂諸蠻册酋長、所至無不聽」。

さて、ウィエンチャン軍は翌1800年に参戦することになる。それに先立って1799年末、陳光耀と武文勇率いる西山軍数万が、帰仁から改名された平定を包囲した。1800年陰暦3月、阮福映は帰還した阮文瑞を乂安攻撃のために再度ウィエンチャンに向かわせた。瑞は150人の増援とともに出発した(83)。一方で阮福映は南風を待って、陰暦4月に大軍を率いて平定の救援に向かう。この戦いには高羅歆森（タイ語ではプラヤー・カラーホーム・プロム）率いるカンボジア軍も追って参加した(84)。

陰暦6月に阮文瑞らはウィエンチャン軍とともに乂安を攻め、阮名楽や阮文治の軍を破った。清華と興化でこれに呼応する動きが現れ、西山朝を疲弊させた(85)。この戦いは2本ある『ウィエンチャン年代記略述本』のうちの1本、162年申年条（1800/1年）にも見え、オン・トゥアイ（องทวย ‘Ong Thūai. 阮文瑞の瑞 Thoại であろう）がウィエンチャンに援軍を要請し、プアン方面に攻め込んで人々を拉致して帰ったことを記す（*Phongsāwadān yọ̄ mūang wīangcan.* 1941b: 191）。

陳光耀と武文勇はこれらの動きに動揺したものの、その年のあいだ平定城を包囲し続けた。阮福映軍は翌1801年陰暦正月に施耐港（平定の港）の海戦に勝利したが、平定を救うことはできなかった(86)。

1801年陰暦2月、ウィエンチャンからの使者が阮福映に上奏文と乂安・富春の地図を献呈するとともに、時期を決めて西山を攻撃することを要請

---

(83)『大南寔録正編第一紀』巻11、27葉裏、己未20年12月条、巻12、6葉裏、庚申21年3月条。

(84)『大南寔録正編第一紀』巻12、13葉表、庚申21年5月条。「眞臘藩僚高羅歆森管番兵五千人象十餘匹、至嘉定。東宮景派委藩鎭留守宋福玩送于軍次」。なお巻12、10葉表、同4月条には「暹羅遣丕雅肥伐獻粟三十車。厚賜遣還」とあるが、年代記に対応する記事なし。

(85)『大南寔録正編第一紀』巻12、17葉裏–18葉表、庚申21年6月条。「六月、上道將軍阮文瑞・典軍劉福祥等管所部及萬象兵、從上道攻乂安賊黨。以該奇潘文記、該隊阮文蘊爲先鋒、破賊都督阮名樂于布屯。又與賊駙馬阮文治戰於藍屯、治大敗走。於是清化藩臣何功泰・興化土司潘伯奉起義兵策應。北河處處蠢動、賊衆疲於奔命矣」。

なお、ウィエンチャン軍の侵攻ルートや、以下に登場する地名については、筆者の能力不足にゆえに不明とせざるを得ない。ベトナム―ラオス間の交通路については嶋尾（2011）を参照されたい。

(86)『大南寔録正編第一紀』巻12、22葉裏–23葉表、庚申21年7月条、38葉裏、同12月条、巻13、3葉裏–5葉表、辛酉22年正月条。なお捷報をシャムに伝えたとある。年代記の小暦1163年6月白分3日条（1801年4月15日）（PRPR1: 170）が対応する記事か。なおそれに先立って、『大南寔録正編第一紀』巻12、24葉裏、庚申21年8月条に「暹羅遣使獻雄象二匹」とあるが、年代記に対応する記事なし。

した。陰暦3月には、命令なく帰還した阮文瑞に代えて黎文春をウィエンチャン軍との攻撃のために派遣した[87]。一方、阮福映はまず富春を攻めることで平定の包囲を解かしめる策に出た。その結果、映は1801年陰暦5月戊寅（6月13日）に富春を落とす。阮光纘は北に逃亡した。映はウィエンチャンに連絡し、少数民族の諸勢力に要路を扼させるとともに、病没した黎文春に代わって劉福祥とウィエンチャン軍に乂安に攻め込ませた[88]。しかしその一方で、食料が尽きた平定では、兵士を害さぬことを条件に、守将の武性と呉従周が自殺したのち、城を陳光耀に明け渡した[89]。

陰暦8月に劉福祥とウィエンチャンの将・破雅駆哺が歯多・欽吉から下って三叉関を落とし、さらに阮文現を清漳（現在のゲアン省）において敗死させ、乂安を震撼させた[90]。この攻撃は『ウィエンチャン年代記略述本』の1本にも記録されている。

> 暦経ること163年酉年（1801/2年）、プラヤー・スポーが司令官となってケーオをシーダー船着き場において攻撃した[91]。

『大南寔録』の破雅駆哺（Phá Nhã Khu Bộ）がプラヤー・スポー、歯多

(87)『大南寔録正編第一紀』巻13、11葉表裏、辛酉22年2月条。「萬象遣使來貢【銅鉦十面、白犀角一座】。以乂安·富春地圖進表。請刻期會討賊。使至嘉定送詣行在拜謁。帝令爲書答復、厚款其使、遣之還【賜國長琦琦四兩、鳥槍二杵、白鉛・白錫各一百斤】」。同16葉表、同3月条。「上道將軍阮文瑞自萬象還嘉定。帝以其不竢召命、嚴譴之、付留鎭臣議其罪。而諭令參軍黎文春代領所屬二百余人、會萬象討賊。瑞尋降該隊管清洲道」。

(88)『大南寔録正編第一紀』巻13、23葉裏–24葉表、辛酉22年4月条、巻14、1葉裏、同5月戊寅条、6葉表–7葉表。「賊董理・阮文愼鎭乂安移書招諭鎭寧蠻册。萬象國長昭印獲其書、使上道該隊宋福琬回京以獻。帝命典軍劉福祥率所部從甘露道致書于萬象、及諭諸蠻扼守要路防遏賊徒奔竄。祥既至適參軍黎文春病卒。乃兼領其軍、置爲前遊五定【中前左右後】六支、與昭印刻期直下乂安、討賊。清華上道統領何功泰、使人奉表、密言軍事。帝諭之曰「今克復舊京。賊阮光纘奔北。已上道典軍劉福祥會萬象攻乂安。爾宜率所部攻清華、竢我規措略定、進取北河、以收一統。爾其勉之」」。

(89)『大南寔録正編第一紀』巻14、12葉裏–13葉裏、辛酉22年5月条。

(90)『大南寔録正編第一紀』巻15、1葉裏–2葉表、辛酉22年8月条。「上道典軍劉福祥率所部六支兵、攻乂安。萬象亦遣其將破雅驅哺率蠻兵四千餘人、竝進從齒多・欽吉、而下兵至香山羅山、攻賊三叉關大破之。收獲船艘礮械甚衆。復與賊都督阮文現戰于清漳六年城、現敗死。賊衆降者如歸市。乂安爲之震動。賊乃燒燬数縣民家、爲清野。計軍粮、不給。萬象兵退。祥引兵船、由律海口回灝江。【齒多・欽吉均蠻地名。香山・羅山・清漳均縣名】」。

(91) *Phongsāwadān yǭ mūang wīangcan*. 1941b: 191. “ศักราชได้ ๑๖๓ ปีฮวงเฮ้า พระยาสุโพฯ เป็นแม่ทัพไปตีแกวท่าสีดา”

（Xỉ Đa）がシーダーを指すのは間違いない。ただしシーダー船着き場や欽吉がどこにあたるのかは不明とせざるをえない。

Ⅸ　シャム軍のラオス作戦への参加

翌1802年正月、阮福映軍は鎮寧塁（クアンビン省ドンホイ）と日麗河口に攻め込んできた阮光垂らの軍を返り討ちにし、撤退する阮光纘の軍を灝江に破った。これによって阮福映は、大勢はほぼ決したと判断した(92)。再三作戦への参加の約束を翻してきたシャム軍が助力に駆けつけるのはその後のことである。

すなわち『大南寔録正編第一紀』巻16、10葉表、壬戌23年2月条に、

> シャムはその将・屋牙茶知を遣わし、兵5000をもって上道よりウィエンチャンの兵と合流して攻め、乂安の賊兵を沙南に破り、使者を派遣して捷報を献じた。帝は復書させ、これを褒奨した(93)。

とあって、シャム軍がウィエンチャン軍とともに沙南なるところで西山軍に勝利したことを記録している。ただしこれに対応する記事は『ラタナコーシン朝年代記』にはない。とはいえ『大南寔録』以外にも史料はある。『ウィエンチャン年代記略述本』の1本の163年条（1801/2年）に、

> タイ［人］がナコーン［パノム］市に来ること2万［人］。プラヤー・タイナームに従う(94)。

とある。ブリージールはこのタイ人を同年条に見えるシーダーにおけるベトナム人との戦い（1801年）のために来たと指摘する（Breazeale 2002: 280, n. 15）。しかしすでに見たように、『大南寔録』の辛酉22年8月条にシャ

(92)　『大南寔録正編第一紀』巻16、1葉表–4葉表、壬戌23年正月条。
(93)　「暹羅遣其將屋牙茶知、將兵五千從上道與萬象兵合攻、破乂安賊兵沙南【地名】、遣使來獻捷。帝令復書褒奬之」。
(94)　*Phongsāwadān yǭ mūang wīangcan*. 1941b: 191. “ไทยมาเมืองนคร ๒๐๐๐๐ ตามพระยาใต้น้ำ”

ム軍の参戦は記録されていない。163年は1802年4月までに当たるので、この記事は上記の壬戌23年2月条に対応する。ただし2万人よりは『大南寔録』の5000人のほうが現実的である。

公刊されている史料からはここまでしかわからないが、シャム軍の活動はこれ以後も続いていた。平定城を占領していた陳光耀と武文勇は金銭が尽き、阮福映軍が迫るに及んで、ついに1802年陰暦3月に城を棄てて兵3000人とともに上道経由で乂安に出ようと試みた。映は広南・甘露に兵を派遣して守らせるとともに、シャムとウィエンチャンに連絡した(95)。このときシャムに送った書簡の摘要が『隣好例』に得られる。

> 壬戌年6月某日、上道欽差該奇・軒(96)を派遣して国書を送らせ、シャムに行かせて報告するには、「すでに帰仁を回復し、偽耀（陳光耀）と偽勇（武文勇）が西山上道に走り、偽札（阮光纘）(97)と偽垂（阮光垂）が灝江と柴塁（鎮寧塁）(98)を守ることができずに北城（昇龍）に逃げ帰ったため、本国の大兵は勝利に乗じて北城に進攻した」と。
>
> この月に欽差該隊・定、翰林・養(99)を遣わしてシャムに行かせ、軍事の機要と情勢を報告し、あわせて銀をもって硝石・鋼・鉛・錫・蘇木などを購入させた(100)。

陳光耀と武文勇が平定城を棄てて上道に逃げたこと、阮光纘と阮光垂が先の鎮寧塁と灝江の戦いで敗れて撤退したことをシャムに報じている。陰暦

(95)　『大南寔録正編第一紀』巻16、12葉裏–13葉表、壬戌23年3月条。

(96)　上道欽差該奇は武官の官名であり、軒は名。姓は不詳。

(97)　札は阮光纘の別名。『大南正編列伝初集』巻30、偽西列伝、阮光纘、43葉表。

(98)　1631年に阮福源が鄭氏の軍の侵入を防ぐために、陶維慈に命じて現在のドンホイに塁を築かせた。その塁が日麗塁であり、俗名を柴塁という（『大南寔録前編』巻2、20葉表裏、辛未18年8月条、『大南列伝前編』巻3、諸臣列伝、陶維慈、14葉裏–15葉表）。『西山外史』6葉裏は、『大南寔録正編第一紀』巻16、1葉表、壬戌23年3月条の「鎮寧壘」を「日麗壘」に作る。これらから柴塁＝日麗塁＝鎮寧塁と考えられる。

(99)　欽差該隊は武官の官名であり、定は名。翰林は翰林院であるが、いかなる官職に就いていたかは不明。養は名である。両名とも姓は不詳。

(100)『隣好例』2葉表裏。「壬戌年六月日、遣上道欽差該奇軒、遞國書如暹、報明「已收復歸仁、僞耀・僞勇遁走西山上道、及僞札・僞垂失守灝江・柴壘、走回北城。本國大兵乘勝進攻北城」。
　是月放差欽差該隊定・翰林養如暹、報明兵機事勢、并將銀辨買牙硝・鋼子・烏鉛・錫・蘇木等項」。

10月にシャム宮廷から返信が届く。

> 10月某日、密かに（欽？）差該隊・貴[101]がシャム国の昭丕雅（チャオプラヤー）が肅んで吏部に返信した公文2通を伝送してきた。うち1通に言うには、「シャム兵はまさに進んで偽勇と偽耀を追っているが、いまだ報告がない。先にその国の王がすでに該隊・定と侍翰・選[102]に与えて、火薬・蘇木・鉄などを持って帰らせたことを知らせるとともに、ここに庫にある硝石・鋼・鉛・錫・白火石（？）を用意したので翰林・養に交付し、持って帰らせて納めさせた」と。もう1通に言うには、「その国の王はすでに該奇・軒が上道の軍事について詳しく述べたのをはっきりと聞き、日本の綵緞の上等なもの1疋を用意するに及んで、翰林・養に渡し、持って帰らせて上進させた」と[103]。

このように、阮福映からの連絡に応じて、シャム軍は陳光耀と武文勇を捕えるべく追っていたことがわかる。次章で引用するが、『隣好例』によれば、シャム軍は晏化の駅夫と、阮光纘と阮光垂が晏化に返答した密書2通を得たため、陰暦12月に阮福映に返書を送るとともにそれらを引き渡している[104]。

これらシャム軍の動向と書信の往来について『ラタナコーシン朝年代記』は記しておらず、やはり不備があると言わざるを得ない。また映側が送ったのは「国書」であったのに対して、返信はチャオプラヤー―大蔵大臣チャオプラヤー・プラクランであろう―から吏部への公文であったことも注意

---

(101) 貴は名、姓は不詳。

(102) 侍翰は侍翰院（君主の官房のひとつ）。選は名であるが、姓は不詳。

(103) 『隣好例』2葉裏–3葉表。「十月日、密差隊該隊貴遞回暹國昭丕雅肅復吏部公文二道。内一道謂「暹兵方進追僞勇・僞耀、未有回禀。及覆報前期該國王已交與該隊定・侍翰選、遞回火藥・蘇木・鉄子等項、茲辨得在庫牙硝・鋼子・烏鉛・錫・白火石、交與翰林養遞回進納」。一道謂「該國王、已明聽該奇軒具道上道兵事、及辨得日本綵緞上好壹疋、寄在翰林養該奇軒、遞回上進」」。

(104) 陳光耀は乂安上道で、武文勇は清華で阮福映軍に捕らえられ、のちに処刑された。阮光垂は自殺している。『大南寔録正編第一紀』巻17、15葉裏、嘉隆元年6月癸卯条、16葉裏、同6月癸丑条、18葉表、同6月庚申条。

しておきたい。

それではなぜ1802年になってようやくシャム軍は参戦できたのであろうか。これまでビルマとの戦いゆえにシャム宮廷は援軍を派遣できなかったのであれば、当然ビルマとの関係を検討すべきであろう。1792年のダウェーの戦い以後、シャムとビルマが争っていたのは主に現在のタイ北部においてである。少し遡ってこの地域とビルマとの関係を確認しておこう。

もともと1764年から翌年にシンビューシン治世下のコンバウン朝はチェンマイを抑え、さらにルアンパバーン、ウィエンチャンを服属させ、アユタヤー攻撃に備えた（KBZ, vol. 1: 374–377）。1771年にはウィエンチャンがビルマ軍の支援のもと、離反したルアンパバーンを攻め、後者は再びビルマに服従する。しかし1778年にトンブリー朝がルアンパバーン軍とともにウィエンチャンを破って服属させた。ルアンパバーンもトンブリー朝に従属し、そのときビルマとの関係は途切れた。ラタナコーシン朝に入っても、両国はシャムの属国であった。1788年に、ルアンパバーン王スリヤウォンがビルマに遣使したことを理由に、シャム宮廷の許可のもとウィエンチャン王ナンタセーンによって排除された。シャム宮廷はスリヤウォンを投獄して、その兄アニルットをルアンパバーン王に就けた。野心のあったナンタセーンも1794年に一世王によって廃位され、インタウォンが代わった[105]。

一方、タイ北部では1774年にカーウィラがタークシンに臣従し、ビルマに反旗を翻した。新たに立った一世王にもカーウィラは従った。1787年にマハーゼーヤトゥーラ率いるビルマ軍が侵入したが、カーウィラ軍とシャム軍によって押し返された。1797年にカーウィラがチェンマイを新都に定めると、すでに見たようにボードーパヤーはそれを占拠すべく、ネーミョーチョーティンティーハトゥーを総司令官として軍を進めさせた。翌年3月にカーウィラは、バンコクから増援に駆けつけた副王とともにこれを退けた。1799年にもビルマ軍が来襲する動きがあり、シャム宮廷はウィエンチャン軍を動員したが、戦闘には至らなかったのもすでに述べた。世紀が代わるころ、ビルマの拠点はチェンセーンを残すのみとなり、その一

（105）*Phongsāwadān mūang lūang phrabāng*. 1963: 340–343; PRPR1: 131–132; DC, vol. 1: 175–176 Wyatt 1994 (1963): 184–200; Breazeal 2002.

方でカーウィラはビルマの支配下にあるシャン地域に出撃しては人々を拉致して帰るまでになった[106]。

このように1802年までに、今日のタイ北部とラオス北部からビルマの支配はほぼ駆逐され、当該地域はシャムの影響力のもとに置かれていた。そのためシャム宮廷に阮福映に援軍を送る余裕ができたのではないか。唯一残ったビルマ側の拠点、チェンセーンは1802年にウィエンチャンから、翌年にチェンマイから攻撃され、最終的に1804年7月にチェンマイ・シャム連合軍によって落とされた[107]。

X　阮朝成立直後におけるシャムとの通信

さて、阮光纘はすでに嘉慶帝からも見捨てられていた[108]。阮福映は1802年6月1日に天地を祀って嘉隆という元号を定めた。7月3日に乂安に入り、20日には昇龍に入城する。阮光纘はすでに城外に逃げていたが、住民に捕らえられて阮福映に引き渡された[109]。ここに西山朝は滅び、阮朝による南北一統が成った。

それでは阮朝開闢に際して阮福映はシャムにいつ、何を、どのような形で伝えたのだろうか。先行研究は特に注目していないが、この点について『大南寔録』と年代記に食い違いがある[110]。

『大南寔録正編第一紀』巻18、17葉表には、嘉隆元年陰暦8月にシャム、カンボジア、ウィエンチャンがそれぞれ使者を遣わし、国書を奉じて来賀

---

(106) KBZ, vol. 1: 490–495; KBZ, vol. 2: 52–55, 91–101; TCM: 145–170; CMC: 148–172; PRPR1: 96–99; DC: 132–135. なおPRPR1: 155; DC, vol. 1: 209–210は1797年から98年の戦いを小暦1157年5月条（1795年3–4月）に記すが、誤り。

(107)『大南正編列伝初集』巻33、外国列伝、万象、30葉表裏。NL. CMH. R. I. C.S. 1166, no. 2; TCM: 174–176; CMC: 176–178; PRPR1, pp. 185–186; DC, vol. 1: 268-271.

(108)『大南寔録正編第一紀』巻14、14葉表裏、辛酉22年5月条によれば、1801年に富春を奪われたのち、阮光纘は清に遣使して援軍を求めたが、許されなかったという。嘉慶帝は、ベトナム国内の争いに不介入の姿勢を貫き、纘が海賊と関係があることを口実に、その滅亡を座視した（豊岡2006）。

(109)『大南寔録正編第一紀』巻17、1葉表、嘉隆元年5月庚午条、14葉裏、同6月癸卯条、18葉表、同7月庚申条。

(110) Rosenberg（1975: 113）は全面的に『大南寔録』の記述に依拠している。Eiland（1989）とMorragotwong（2011）はこの問題に言及しない。

したとある。その後12月1日に阮福映は富春の太廟に阮光纘らを献じたのち処刑した。また清朝に使者が派遣されている。翌嘉隆2年（1803）陰暦2月に、映はシャムに遣使した(111)。『欽定大南会典事例』巻136、礼部、柔遠、暹羅、1葉表はこの遣使を阮朝とシャムの通好の嚆矢に数える。このとき阮福映が一世王に送った国書のタイ語訳が伝世しており、それが現存するもののなかでは最古の阮朝とシャムの君主間で交わされたプララーチャサーン（王の書簡＝国書）である(112)。

一方、『ラタナコーシン朝年代記』では、小暦1164年条（1802/3年）に、『大南寔録』にはない阮福映からの通信が見られる。

【史料5】

その年、安南国王がさらに1通のプララーチャサーンをウィエンチャン路から送ってきた(113)。［そこに］言うには、「⑴ 7月白分1日にフエ（富春）市を得て(114)、8月黒分6日（7月20日）にタンキア（昇龍）市を得た。⑵ 自らをチャオペンディン・ヤイ（大国王）に登らせ、⑶ ヤーローン（嘉隆）第1年というイーホー（懿号）を用いた」と。⑷ プララーチャサーンにはドゥッククワーントゥアン（ดึกกวางเทือง dưk kwāng thūang＜徳皇上 dức hoàng thượng）と名を記していた。以後、かつてのように金銀樹を送ることはなくなった(115)。

(111)『大南寔録正編第一紀』巻19、3葉裏–4葉表、嘉隆元年11月甲戌条、9葉裏–10葉表、同11月条、巻20、17葉表裏、嘉隆2年2月条。

(112) NL. CMH. R.I. C.S. 1164, no. 3. 日付は「ヤーローン（嘉隆）暦2年戊年第4年5月黒分5日」であり、1803年4月11日（嘉隆2年2月20日）に当たる。この史料については小泉（2008：77–78）、川口（2019：123–124）も参照。

(113) 1803年の阮福映の国書にも、先にウィエンチャン経由でバンコクに通知を入れていたことが記されている。註112参照。

(114) 7月白分1日は、小暦1164年であれば1802年6月1日。歴史的事実に合わせて小暦1163年とするならば、1801年5月13日に当たる。実際に富春が陥落したのは辛酉年陰暦5月丙子（1801年6月11日）であり、小暦1163年8月白分1日に当たる。したがって7月は8月の誤りである可能性が高い。

(115) PRPR1: 173–174. “ในปีนั้นเจ้าอนำก๊กมีพระราชสาสน์ส่งมาทางเมืองเวียงจันท์อีกฉบับหนึ่ง
บอกว่าได้เมืองเว้เมื่อณเดือนเจดขึ้นค่ำหนึ่งได้เมืองตั้งเกี๋ยเมื่อณเดือนแปดแรมหกค่ำ
ยกตัวขึ้นเปนเจ้าแผ่นดินใหญ่ ใช้ยี่ห้อว่ายาลองปีที่หนึ่ง ลงชื่อในพระราชสาส์นว่าดึกกวางเทือง
ตั้งแต่นั้นก็มิได้ส่งต้นไม้ทองเงินเข้ามาเหมือนแต่กอนฯ” DC, vol. 1: 246–247.

この文書に一世王が返信したか否かは記されていない。また嘉隆元年陰暦8月のシャム使節の来賀に対応する記述も年代記にはない。翌小暦1165年条（1803/4年）に嘉隆2年に阮福映が使者とともに送った国書が見える[116]。

双方の史料の溝をある程度埋めてくれるのが『隣好例』である。その壬戌年条（1802年）には以下のようにある。

【史料6】
この月（陰暦10月（10月27日–11月24日））、翰林院の盛徳伯[117]を遣わし、国書を持ってシャムに行かせた。［国書は］(1) すでに帰仁・富春2府を回復し、聖上が宝位に登られ、嘉隆に改元し、宝印2個を用いることを述べ、さらにすでに北城（昇龍）を収取したことを述べた。12月某日（1802年12月25日–1803年1月22日）、盛徳伯は昭丕雅伐棱（チャオプラヤー・プラクラン）が粛んで返信した公文2通を持って帰ってきた。うち1通に言うには、「その国の王は晏化の駅夫と、偽札と偽垂が晏化に返信した密書2通を得て、盛徳伯に渡して持って帰らせた」と。もう1通に言うには、「聖上が旧都を回復し、宝位に登られたことについて、その国の王は慶賀に勝えない。(2) 以後、国書を返信するならば、国例に基づいて宝印2個を用いていただきたい」と[118]。

この記事に見える国書が【史料5】の文書に当たると考えられる。富春と昇龍を占領したこと、嘉隆という元号を用いたことが一致する（【史料5】下線部（1）（3）、【史料6】下線部（1））。

一方で、【史料5】下線部（2）の「チャオペンディン・ヤイ」については、

（116）PRPR1: 179; DC, vol. 1, pp. 255–256.
（117）盛徳伯は爵位であろうが、その姓名は不明。
（118）『隣好例』2葉裏–3葉裏。「是月遣翰林院盛德伯遞國書如暹、叙明已恢復歸仁・富春二府、聖上光登寶位、改元嘉隆、用寶印貳顆、兼叙已收取北城等事。十二月日、盛德伯遞回昭丕雅伐棱肅復公文二道。内一道謂「該國王收獲晏化人遞與僞札・僞垂報復晏化密書二封、交與盛德伯遞回」。一道謂「聖上克復舊京、光登寶位、該國王不勝慶賀。嗣後有國書報復、乞依國例、用寶印貳顆」」。

ことさらに「ヤイ（大きな）」を付し、またシャム宮廷は清朝の皇帝号を「プラチャオペンディン」とタイ語訳したこともある（川口2019:120）ため、【史料5】下線部（2）は「皇帝」に即位したことを意味している可能性がある[119]。しかし、阮福映は臣下の要請によって元号の制定こそ行ったが、尊位に登ることは固辞した。阮光纘を捕らえたのち、諸臣から帝位に即くように請われたが、やはり謙譲して受け入れず、王位のままであった。彼が正式に皇帝の位に登るのは1806年6月28日のことである[120]。したがって、陰暦10月の国書に皇帝号を記していたとは考えにくい。同様に、【史料5】下線部（4）の「ドゥッククワーントゥアン（徳皇上）」という表記も疑わしい。あったとすれば、『隣好例』に言う「聖上光登寶位」のように、皇や帝の字を避けた表現であったのではないか。実際にはこのとき阮福映は新たな位に登っていたわけではないので、あくまでこれはシャム向けの便宜的な表明であったことになる[121]。

さて、この阮福映の国書に対してシャム宮廷は国王名義の国書ではなく、大蔵大臣チャオプラヤー・プラクランの書簡によって返信している。返信にことさら【史料6】下線部（2）のように書かれているということは、このときの映の国書にはその宝印2個が捺されていなかったのだろう。そのためシャム宮廷は国書によって返信するに値する、完全な様式を備えた文書とはまだ見なさなかったのではないか。

嘉隆年間のシャム王宛国書にいかなる印璽が捺されていたのかはいまだ明らかになっていない。『隣好例』はその手がかりにはなるだろう。阮朝が通知し、シャムが以後それを国書に捺すように求めた宝印2つとは何か。1802年4月21日、建元に先立って5つの印璽（国宝）が作成された。そのうちの2つであろう。それらの印璽の印文と用途を『大南寔録』から引用すれば、以下の通り。

---

(119) DC, vol. 1: 246は“empeor”と英訳している。

(120)『大南寔録正編第一紀』巻17、1葉裏–2葉表、嘉隆元年5月条、巻18、17葉裏–18葉裏、同8月条。皇帝即位は巻29、1葉表、嘉隆5年5月己未条。

(121)『大南寔録正編第一紀』巻60、20葉表裏、嘉隆18年12月条、「帝初嗣王位于嘉定凡二十二年、及克復舊京、建元嘉隆、天下既定、始卽帝位凡十八年、中興創業功德兼隆、鴻厖以來未之有也」とあるように、『大南寔録』でも嘉隆元年に帝位に即いたとする便宜的な表現が見られる。

討罪安民之寳：命將出師用之。
勅正萬民之寳：戒飭臣民用之。
命德之寳：皇親大臣陞授公爵以上用之。
制誥之寳：陞授侯爵以下用之。
國家信寳：常行事用之[122]。

筆者は以前に用途から、これらのうち「國家信寳」を国書に用いていたのではないかと推測した（川口2019：130）。問題はもう1つである。残り4つの印璽の用途は国書を想起させない。「討罪安民之寳」は用途からも印文からも国書に使うとは考えにくい。「勅正萬民之寳」はその用途から、敵礼関係にあるシャム王に送る文書に用いるにはそぐわない。ただしその印文は国書にあってもそこまでおかしくはない。「命德之寳」と「制誥之寳」も、やはり国書に用いるとは考えにくいが、もし使うとすれば、より高位の爵位の陞叙に用いる「命德之寳」であろうか。印文も、国書に十分ありうるものである。

したがって、2つの印璽とは「國家信寳」と、「命德之寳」または「勅正萬民之寳」ではないか、というのが暫定的な見解である。

以上のように、1802年陰暦10月に阮福映は国書を一世王に送って、元号制定と昇龍占領などについて通知した。シャムからは大蔵大臣の返信が陰暦12月に阮朝に届いた。翌年陰暦2月に阮朝はシャムに遣使して国書―おそらく新製した印璽を捺したもの―を齎し、一世王が国書によって返信する。かくして両国君主間における国書の往来が始まった。一方で『大南寔録』に見える嘉隆元年陰暦8月のシャムからの使節は、他にこれを記した史料がないため、事実とは見なし難い。

おわりに

本稿は1782年から1802年までの20年間におけるラーマ一世王と阮福映の関係について、シャム側とベトナム側双方の史料を突き合わせ、史料批

(122)『大南寔録正編第一紀』巻16、14葉表裏、壬戌23年3月庚寅条。

判を加えながら逐一検討してきた。その結果をここで振り返ることはしないが、従前よりも歴史的事実に近づけたはずである。また結果として両者の関係の軌跡を、西山朝を始め、カンボジア、ビルマ、ウィエンチャン、チェンマイといった広く東南アジア大陸部の諸国家間の関わりのなかで描くことができた。もとより、チャクリー兄弟と阮有瑞の講和の時期を始め、なおも考証を要するところはある。筆者の能力不足から、比定できなかった地名や人名も少なくない。諸賢の御批正を請う次第である。

それでは、始めに指摘したように、この20年間がラタナコーシン朝・阮朝の関係、とりわけビルマが視野に入っていたその関係へとどのようにつながっていったのかをまとめておこう。

1785年、ビルマ軍が大挙してシャムに侵入したとき、亡命していた阮福映とその一党はシャム軍とともにビルマ軍と戦った。1798年にも、ビルマ軍とイギリス海軍が来寇するとの噂が流れ、シャム宮廷の要請に応じて阮福映は軍船100艘あまり、兵士約7000人を援軍として派遣した。同様の要請は1804年と1809年にもなされた。実際に嘉隆帝が援軍を派遣することはなかったものの、シャム宮廷は引き続き阮朝にビルマとの戦いにおける協力関係を期待していたことがわかる。

他方で本稿は先行研究があまり注目してこなかった、嘉定の阮福映政権と一世王政権との関係について詳述してきた。ラオスを経由してベトナムとシャムのあいだで人が行き来するなか、阮福映政権はラオス方面から主に乂安へ攻撃を加えようとし、そのために1792年、94年、98年の3度にわたって一世王に援軍を求めた。一世王政権は承諾しながらも、結局援軍の派遣は中止された。その理由はそれぞれ、ビルマ軍が攻めてきたため、ビルマとの外交折衝の最中であったため、ビルマ軍が来寇する可能性があったため、であった。ビルマ軍がラオスとタイ北部がほぼ駆逐されてから、ようやく1802年に一世王は阮福映にウィエンチャン経由で援軍を派遣することができた。

つまり、西方のビルマに対処しているあいだ、一世王政権は東方のベトナム方面に軍を派遣することができなかったのである。これは客観的にその通りであったと考えられる。

『コンバウン朝大御年代記』によれば、シャムとタイ北部に侵入したビ

ルマ軍の兵数は、1785年の大遠征では13万4000人、1787年のチェンマイ遠征では8万人、1792年のダウェー遠征では2万4000人、1797年のチェンマイ遠征では5万5000人であったという。対するシャム軍は1785年では4万8000人、1792年では4万人であったと『ラタナコーシン朝年代記』は記す[(123)]。同年代記は1787年と1797年の戦いにおけるシャム軍の兵数を明記していない。『コンバウン朝大御年代記』によれば、それぞれ5–6万人、4–5万人であったという（KBZ, vol. 2: 53, 100）が、『ラタナコーシン朝年代記』を見るに、一世王期のシャム軍の最多兵力は前述1785年の4万8000人であるため、ビルマ史料の6万人は多すぎる感がある。このように、10万人前後の兵力を動員できたボードーパヤー政権に対して、一世王政権は5万人以下の戦力で迎撃しなければならなかったことがわかる。もちろんこれらは年代記の数字ゆえ、実際の数はさらに少なかった可能性がある。しかしそうであるにしても、一世王政権はビルマとの戦いに全力を投入しなければならなかったことに変わりはない。阮福映に援軍を送る余裕がなかったのは事実と考えざるをえない。

このことは、ビルマに注力するためには、シャム宮廷は東方とよい関係を結んでおかなければならないことを意味しよう。二正面作戦は避けなければならない。これはシャム宮廷の阮朝への姿勢を規定したはずである。

確かにエーランドの言うように、一世王と嘉隆帝のあいだには恩義と友誼があったのは本稿でも窺えた。チャクリーは阮有瑞との講和が成ったおかげで、後顧の憂いなくタークシンを排除することができた。それゆえ一世王は、ビルマとの戦いが続くなかでも阮福映に硝石などの軍需物資を支援したのだろうし、最終的には援軍も送った。それらは映が西山朝を打倒するのに一役買ったはずである。明命帝もまた父が一世王から蒙った恩に配慮していた[(124)]。そういった恩義や友誼が両王朝の関係の基礎を作ったのは確かであろう。

さらにエーランドは言う。一世王も嘉隆帝もともに武人であり、馬が合った。彼らの友誼に基づく両王朝の関係は、カンボジアをめぐって多少の問題が起きても揺らぐことはなかった。しかし二世王は文人肌で優柔不断で

（123）KBZ, vol. 2: 34–36, 52, 66–67, 98–99; PRPR1: 65–66, 143; DC, vol. 1: 91–92, 192.
（124）『大南寔録正編第二紀』巻24、24葉表裏、明命4年12月条、巻28、17葉裏、明命5年8月条。

あったために、カンボジアをめぐる問題を悪化させ、阮朝がカンボジアに影響力を広げるのを許してしまったのだ、と。氏はシャムとビルマとの関係以上に、両国君主の性格とカンボジアの動向が、シャムと阮朝との関係を規定していたことを強調する（Eiland 1989: 32–78）。

しかし本稿で見てきたように、両国の関係を見るとき、やはりビルマの存在は軽視しえないものがある。シャムとビルマとの対立は続いていた。18世紀末に繰り返されたシャム遠征はビルマの宮廷財政と社会経済を大きく傷つけ、以後コンバウン朝はシャムに大規模な侵攻を企てることはなかった（斎藤2019：48–53，100–102）が、だからといってシャム宮廷が警戒を解いたわけではない。シャム王が嘉隆帝に宛てた国書にはしばしば、ベトナムは平和になったが、シャムではいまだビルマとの戦いが続いていることが強調されている[(125)]。ビルマ方面に集中するには、ベトナムとの友好関係は不可欠であった。阮朝がシャムのために援軍を派遣することはなかったものの、二正面作戦が至難である以上、阮朝がこちら側に付いているという事実自体がシャム宮廷にとっては肝要だったのではないか。

1810年代、カンボジア王アン・チャンは二世王政権を嫌い、阮朝に傾倒した。アン・チャンは阮朝が派遣した保護真臘の監督下に置かれる。しかし阮朝官僚の目がありながら、1815年にカンボジア軍とシャム支配下のバッタンバンとのあいだで戦端が開かれた。阮朝がアン・チャンを庇護した—少なくともシャム宮廷はそう見なした—ことは、のちにシャムが阮朝と開戦した際に、その理由のひとつとして挙げられたほど、重大な背信として記憶されていた（PRPR3: 53）。にもかかわらず、二世王政権は阮朝と国書のやりとりを続け、少なくとも表面上は友好的な関係を維持し続けた。その背景にはやはりビルマがあるのではないか。折しも1815年にはモン人が多数ビルマからシャムに亡命してきていた[(126)]。

シャム・阮朝関係に対するビルマの存在は、さらに視野を広げたとき、より明確な像を結ぶであろう。そもそもコンバウン朝ビルマと西山朝および阮朝とはいかなる関係にあったのだろうか。さらにビルマで踏みとどまらずに、清朝がシャム・ビルマ・ベトナムに対して取った姿勢をも射程に

（125）NL. CMH. R. I. C.S. 1166, no. 2; C.S. 1168, no. 2; Narinthrathēwī 2003: 614–617, 666–668.
（126）NL. CMH. R. II. C.S. 1174–1177, no. 9.

収めたとき、主にカンボジアをめぐって展開したと考えられてきたシャム・阮朝関係は異なる様相を見せることになろう。これらについては別稿を用意している[127]。

史料・参考文献一覧

タイ語

Bančhœt ‘Inthučhanyong (ed.) (1996) *Rātchasakun phrabǭrommarātchawong čhakrī*（チャクリー王統）. Bangkok: Khurusaphā.

BL: *Chronicle of the Kingdom of Ayutthaya: The British Museum Version, Preserved in The British Library*. (1999) Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, the Toyo Bunko.

BR: *Phrarāthaphongsāwadān krung thonburī (somdet phračhao tāksin mahārāt) chabap mǭ baratlē*（ブラッドレー医師本トンブリー朝（タークシン大王）年代記）. (2008 (1864)) Bangkok: Khōsit.

HL: *Phrarāthaphongsāwadān chabap phrarātchahatthalēkhā*（宸筆本王朝年代記）, 2vols. (2008 (1912)) Bangkok: Krom sinlapākǭn.

Narinthrathēwī, Krommalūang (2003). *Čhotmāihēt khwām songčham khǭng phračhao paiyikāthœ̄ krommalūang narinthrathēwī (čhao khrǭk wat phō) tangtœ̄ čhǭ. sǭ. 1129–1182*（ナリントラテーウィー内親王覚書　1767–1820年）. Bangkok: Ton chabap.

NL. CMH. R. C.S.: National Library in Thailand. Čhotmaihēt（行政文書）. Ratchakān thī（治世）. Čhunlasakkarāt（小暦）.

PC: *Phrarātchaphongsāwadān krung thonburī chabap phan čhanthanumāt (čhœ̄m)*（パン・チャンタヌマート本トンブリー朝年代記）. (1969) *Prachum phongsāwadān*, lēm 40. Bangkok: Khurusaphā, pp. 1–144.

Phongsāwadān mūang lūang phrabāng（ルアンパバーン年代記）. (1963) *Prachum phongsāwadān*（年代記集成）, lēm 4. Bangkok: Khurusaphā, pp. 315–369.

Phongsāwadān yǭ mūang wīangčhan（ウィエンチャン年代記略述本）. (1941a) *Prachum phongsāwadān*, phāk thī 70. Bangkok: Rōngphim phračhan, pp. 182–186.

（127）すでに口頭では発表したことがある。Kawaguchi Hiroshi, “Siam-Vietnam Relations in the Reign of Rama I from a Broader Regional Perspective: The Exchange of Envoys and Letters between Siam, Vietnam, Burma and the Qing”, in International Workshop “Correspondence between Crowns: Asian Diplomatic Practice in the 17th–19th Centuries.” (February 20th, 2019. Chulalongkorn University, Bangkok).

Phongsāwadān yǭ mūang wīangčhan. (1941b) *Prachum phongsāwadān*, phāk thī 70. Bangkok: Rōngphim phračhan, pp. 187–197.

PP: *Phrarāthaphongsāwadān chabap somdet phra phonnarat wat phrachētphon: trūat sǭp chamra čhāk ʻēkasān tūa khīan*（プラチェートポン寺プラ・ポンナラット本王朝年代記：写本からの校訂）. (2015) Bangkok: Mūnnihi thun phraphutthayǭtfā nai phraborommarāchūpatham.

PRPR1: Thiphākǭrawong, Čhaophrayā (1996) *Phrarātchpongsāwadān krung rattanakōsin ratchkān thī 1: chabap čhaophrayā thiphākǭrawong: chabap tuakhian*（ラタナコーシン朝一世王年代記：チャオプラヤー・ティパーコーラウォン本写本版）. Bangkok: ʻAmarin.

PRPR2: Thiphākǭrawong, Čhaophrayā (2005) *Phrarātchpongsāwadān krung Rattanakōsin ratchakān thī 2: chabap čhaophrayā thiphākǭrawong tūakhian*（ラタナコーシン朝二世王年代記：チャオプラヤー・ティパーコーラウォン本写本版）. Bangkok: ʻAmarin.

PRPR3: Thiphākǭrawong Mahākōsāthibǭdī, Čhaophrayā (2004 (1995) *Phrarātchpongsāwadān krung rattanakōsin ratchkān thī 3*（ラタナコーシン朝三世王年代記）. Bangkok: Krom sinlapākǭn.

TCM: Wyatt, David K. and Aroonrut Wichienkeeo (eds.) (2000) *Tamnān phūn mūang chīangmai*（チェンマイ年代記）. Chiang Mai: Suriwong Buksēntœ̄.

Yǭng, Nāi (tr.) (1966 (1899)) *Phongsāwadān yūan*（ベトナム年代記）. Bangkok.

漢籍

『嘉定城通志』鄭懐徳撰、戴可来、楊保筠校注（『嶺南摭怪等史料三種』中州古籍出版社、1991年、53–227頁）。

『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』武世営撰、戴可来、楊保筠校注（『嶺南摭怪等史料三種』中州古籍出版社、1991年、229–256頁）。（載本）

「河僊鎮叶鎮鄭氏家譜注釈」武世営撰、陳荊和注釈（『国立台湾大学文史哲学報』第7期、1956年、77–139頁）。（陳本）

『欽定大南会典事例』阮朝国史館編、1852年、1917年刊（西南師範大学出版社、人民出版社、2015年）。

『阮氏西山記』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 3138）。

『後黎野録』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 1318）。

『西山外史』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 2787）。

『暹羅国路程集録』宋福玩、楊文珠輯（香港中文大学新亜書院研究所東南亜研究室、1966年）。
『大南寔録前編』阮朝国史館撰、1844年刊（慶應義塾大学語学研究所、1961年）。
『大南列伝前編』阮朝国史館撰、1852年刊（慶應義塾大学語学研究所、1961年）。
『大南寔録正編第一紀』阮朝国史館撰、1848年刊（慶應義塾大学言語文化研究所、1963、68年）。
『大南寔録正編第二紀』阮朝国史館撰、1861年刊（慶應義塾大学言語文化研究所、1963年）。
『大南正編列伝初集』阮朝国史館撰、1889年刊（慶應義塾大学言語文化研究所、1962年）。
『南史撮要』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 1371）。
『南史緝編』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 12）。
『撫辺雑録』黎貴惇撰（Saigon: Phủ Quốc vụ khanh đặc trách Văn hóa, 1973）。
『雷塘庵主弟子記』張鑑等撰、黄愛平点校（『阮元年譜』中華書局、1995年）。
『隣好例』（ハンノム研究院所蔵鈔本A. 63）。

ビルマ語

KBZ, vol. 1: Maung Maung, U (1967) *Konbaung hset mahayazawindawgyi*（コンバウン朝大御年代記）, vol. 1. Yangon: Letimandaing pounhneiptaik.
KBZ, vol. 2: Maung Maung, U (2004) *Konbaung hset mahayazawindawgyi*, vol. 2. Yangon: Yapye saouptaik.
Than Tun (ed.) (1986) *The Royal Orders of Burma*, part 5, A.D. 1788–1806. Kyoto: The Center For Southeast Asian Studies, Kyoto University.

欧文

Breazeale, Kennon (2002) The Lao-Tay-Son Alliance, 1792 and 1793. Mayoury Ngaosrivathana and Kennon Breazeale (eds.), *Breaking New Ground in Lao History: Essays on the Seventh to Twentieth Centuries*. Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 261–280.
Chen Chingho (1979) Mac Thien Tu and Phrayataksin: A Survey on Their Political Stand, Conflicts and Background. *Proceedings, Seventh IAHA Conference, 22-26 August 1977, Bangkok*, vol. 2. Bangkok: Chulalongkorn University Press, pp. 1534–1575.
CMC: Wyatt David K. and Aroonrut Wichienkeeo (trs.) (1998) *The Chiang Mai Chronicle: Second Edition*. Chiang Mai: Silkworm Books.

DC: Flood, Thadeus and Flood, Chadin (trs.) (1978, 1990) *The Dynastic Chronicles: Bangkok Era, the First Reign*, 2vols. Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies, the Toyo Bunko.

Eiland, Michael Dent (1989) Dragon and Elephant: Relations between Viet Nam and Siam, 1782–1847. (Ph. D. dissertation, George Washington University).

Koizumi Junko (2015) Siamese State Expansion in the Thonburi and Early Bangkok Periods. Geoff Wade (ed.), *Asian Expansions. The Historical Experiences of Polity Expansion in Asia*. London and New York: Routledge, pp. 167–183.

Koizumi Junko (2016) The 'Last' Friendship Exchanges between Siam and Vietnam, 1879–1882: Siambetween Vietnam and France-and Beyond. *TRaNS: Trans -Regional and -National Studies of Southeast Asia*, vol. 4, pp. 131–164.

Mayoury Ngaosyvathn and Pheuiphanh Ngaosyvathn (1998) *Paths to Conflagration: Fifty Years of Diplomacy and Wafeare in Laos, Thailand, and Vietnam, 1778–1828*. Ithaca: Cornell University.

Morragotwong Phumplab (2011) The Diplomatic Worldviews of Siam and Vietnam in the Pre-colonial Period. (MA. dissertation, Department of History, National University of Singapore).

Poole, Peter A. (1970) *The Vietnamese in Thailand: A Historical Perspective*. Ithaca and London: Cornell University Press.

Rosenberg, Klaus (1975) Die Beziehungen zwischen Siam und Vietnam im Spiegel des Dai Nam Thu'c Luc (tien bien und chinh bien de nhat ky). *Oriens Extremus*, vol. 22, no. 1, pp. 87–135.

Wyatt, David K. (1994 (1963)) Siam and Laos 1767–1827. Wyatt, *Studies in Thai History*. Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 183–206.

日本語

石井米雄（1999（1964））「「アユタヤ王朝年代記」考」同『タイ近世史研究序説』岩波書店、273–281頁。

川口洋史（2006）「ラタナコーシン朝前期における文書処理システム—クロム・マハータイ（民部省）を事例として—」『史林』89巻6号、63–104頁。

川口洋史（2015）「「小暦1144年（1782）における王族および官僚の叙任に関する協議書写し」テキストと訳註—ラタナコーシン朝ラーマ一世王政権についての一史料—」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』61号、1–34頁。

川口洋史（2019）「一八世紀末から一九世紀前半における「プララーチャサーン」

―ラタナコーシン朝シャムが清朝および阮朝ベトナムと交わした文書―」松方冬子編『国書がむすぶ外交』東京大学出版会、111-143頁。
北川香子（2006）『カンボジア史再考』連合出版。
小泉順子（2008）「ラタナコーシン朝一世王期シャムの対外関係―広域地域像の検討にむけた予備的考察―」『東洋文化研究所紀要』第154冊、71-104頁。
斎藤照子（2019）『18-19世紀ビルマ借金証文の研究―東南アジアの一つの近世―』京都大学出版会。
坂本恭章訳、上田広美編2006『カンボジア　王の年代記』明石書店。
桜井由躬雄（1979）「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」『東南アジア歴史と文化』8、73-117頁。
桜井由躬雄（1999）「ベトナム世界の成立」石井米雄、桜井由躬雄編『東南アジア史Ⅰ　大陸部』山川出版社、194-232頁。
嶋尾稔（2001）「タイソン朝の成立」桜井由躬雄編『岩波講座東南アジア史4　東南アジア近世国家群の展開』岩波書店、287-312頁。
嶋尾稔（2011）「ベトナム阮朝期のラオス方面ルートに関する覚書」桃木至朗編『中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成』科研費成果報告書、149-158頁。
鈴木中正（1975）「黎朝後期の清との関係」山本達郎編『ベトナム中国関係史―曲氏の抬頭から清仏戦争まで―』山川出版社、405-492頁。
豊岡康史（2006）「清代中期の海賊問題と対安南政策」『史学雑誌』115巻4号、44-68頁。
吉川利治（1975）「19世紀前半カンボジア支配をめぐるタイ・ベトナム関係」『アジア経済』16巻9号、68-75頁。

付記

ハンノム研究院における史料調査にあたっては蓮田隆志氏にご助力いただいた。記して深く感謝したします。また本稿は2018年度東アジア文化研究交流基金若手研究者研究助成による研究成果の一部である。

Rama I and Nguyễn Phúc Ánh, 1782–1802

Hiroshi KAWAGUCHI

Previous studies have shown that Siamese-Vietnamese relations from the end of seventeenth century to the mid-nineteenth century were mainly affected by their competition over Cambodia. However, it was only during the period between 1803 and 1832 that Siamese and Vietnamese monarchs frequently exchanged envoys and letters. The Cambodian affairs, therefore, did not necessarily lead to the formation of close diplomatic relations. Moreover, these letters often mentioned Burma, which hardly bears any connection to the Nguyễn dynasty. Therefore, this paper aims to describe the relations between Rama I and Nguyễn Phúc Ánh from 1782 to 1802 empirically by comparing both Siamese and Sino-Vietnamese sources, to show how these would portend the nature of Siamese-Vietnamese relations after the establishment of the Nguyễn dynasty.

Toward the end of 1781, to attack Nguyễn Phúc Ánh, King Tāksin ordered Čhaophrayā Čhakrī (later known as Rama I) to march into Cambodia. However, Phrayā San revolted Tāksin to imprison him in March 1782. According to the *Hà Tiên Trấn Hiệp Trấn Mạc Thị Gia Phả* 河僊鎮叶鎮鄚氏家譜 which corresponds to the Siamese sources more closely than other Vietnamese sources, after knowing this, Čhakrī made his brother, Surasī, conclude a peace with Nguyễn Hựu Thụy, the general of Ánh's troop, and returned to the capital. Executing Tāksin and San, Čhakrī ascended the throne. Therefore, Rama I's speedy success was partly thanks to Thụy.

Meanwhile, Nguyễn Phúc Ánh fled from Saigon to Bangkok in 1784. He and his followers joined the Siamese army to defend the kingdom against the Burmese attack that took place in 1785-1786. Ánh regained Saigon in 1788 and continued the war against the Tây Sơn dynasty. It is noteworthy that Laos became important during this war. Inspired by Nguyễn Huệ's invasion of the Vientiane kingdom in 1791, in 1792, Rama I and Ánh planned an operation in which the armies of Siam

and Vientiane would attack Nghe An, while Ánh's navy sailed to gain Quy Nhon and Hue. However, this operation had to be postponed because the Burmese invaded to recover Tavoy.

In 1795, Rama I suggested a similar operation to Ánh. However, this operation too did not take place because the Siamese court had to concentrate on dealing with the Burmese diplomatic letter from Martaban. When the Burmese army invaded Chiang Mai in 1798, responding to Rama I's request, Ánh sent a navy to support Siam. However, the navy returned to Saigon without battle. In 1799, Ánh sent a letter to Siam to conduct a joint operation again. Although Rama I agreed to it, the Siamese army could not participate even this time, because Burma made a move to invade northern Thailand. Nguyễn Văn Thoại, with 150 soldiers, reached Vientiane. He and the king of Vientiane attacked Nghệ An together in 1800. In 1801, while Ánh regained Hue, Thoại invaded Nghệ An again with Vientiane troops.

Finally, 5000 Siamese troops were dispatched, and they, along with the Vientiane army, defeated the army of Nghệ An in the third lunar month of 1802. According to the *Lân Hiếu Lệ* 鄰好例, the Siamese troops also aimed to capture two Tây Sơn generals, who were running from Qui Nhon toward Hanoi. Because the Burmese forces had almost been driven away from northern Thailand and Laos, by 1802, Rama I must have had some leeway to send troops to support Ánh. The *Lân Hiếu Lệ* describes that after he captured Nguyễn Quang Toản, in October or November 1802, Ánh informed Rama I of the establishment of the new era, Gia Long, the making of new seals, and the occupation of Hanoi.

For Rama I, Nguyễn Phúc Ánh was his collaborator in the war against Burma. On the contrary, when Burma attacked Siam, the Siamese court could not afford to send reinforcements to Ánh. While the Burmese king Bodawpaya could mobilize around 100,000 soldiers to invade Siam, Rama I had only 40,000 to 48,000 troops for defense. He could not wage a war on two fronts. The Siamese court needed to have good relations with the east to focus on the war against Burma in the west. These must have been some of the factors that regulated the nature of the later relationship between Siam and the Nguyễn dynasty.